「登高行」その後について

山形大学学術研究院・山形大学蔵王樹氷火山総合研究所　柳　澤　文　孝

これまでで最も古い大正10年の蔵王のアイスモンスターの写真が大正10年に出版された「登高行」３年で見つかったことをご報告いたしました。

「登高行」の１年から17年までを調べ、内容（＊年：号　出版年月　＊樹氷のある地域：王　西吾妻　その他の樹氷地　＊合宿等の期間　＊著者名　＊記述内容：アイスモンスターについて　エビノシッポについて）をまとめました（表　図１－図47）。

大正10年の登高行３年の写真と紀行文をきっかけに「樹氷」「蔵王」「スキー」という認識が全国に広まるとともに、スキー場の開設にもつながったことが分かってきました。

⑴　蔵王（宮城側）

大正13年発行の登高行５年によりますと、大正12年に遠刈田温泉組合により蔵王（宮城側）の賽の磧にスキー場が開設され、スキー場の端に２階建てのスキー小屋（賽の磧小屋）が作られました。登高行にも遠刈田温泉組合による宣伝のページがあります。なお、大正10年に鉄道省が発行した鐵道旅行案内の鳥瞰図はありませんが、大正13年の鳥瞰図にはスキー場（賽の磧）がのっています。

登高行５年の峨々温泉の宣伝のページに賽の磧のスキー場から上山や高湯（蔵王）へ抜けるいくつかのコースの記載が載るようになります 。昭和２年１月の官報には、峨々温泉について、熟達者むけのスキーコースとして記載されています。

⑵　五色温泉スキー場

五色温泉スキー場は明治44年に開設された日本最古のスキー場です。西吾妻に冬季登頂した人の紀行文や、慶応大学山岳部が大正初期から行っていた冬季合宿の記録にも「樹氷」の記述はありませんでした。大正13年以降の登高行の西吾妻の記録や紀行文には「樹氷」が頻繁に登場するようになります。五色温泉スキー場にある宗川旅館の登高行４年の宣伝のページには「樹氷」はでてきませんでしたが、登高行５年から出てくるようになります。登高行５年には樹氷っぽい絵の描かれた宣伝のページもありました。

⑶　「エビノシッポ」について

登高行７年には「エビノシッポ」の記述があります。今のところ、「エビノシッポ」について最も古い記述です。

⑷　スキー場開設について

昭和10年発行の「日本スキー発達史」という冊子によりますと、賽の磧で最初にスキーをしたのは大正10年の慶応大学山岳部と記されていました。賽の磧で初スキーをした後に、宮城県側から山形県側まで冬季初踏破したことになります。ついで、大正11年～12年には東北帝国大学や旧制二高の山岳部が賽の磧で冬季合宿を始めます。これらを契機に大正13年になって賽の磧にスキー場が作られたことになります。

賽の磧スキー場開設の影響は山形側にもおよんでいたようです。伊東五郎先生の著書（蔵王50年の歩みとスキーの発達）に大正14年に起こった矢吹事件のことがでていました。大正14年のはじめ、高湯温泉（現在の蔵王温泉）に矢吹なる人物が、賽の磧スキー場を開設したのは自分であると称して訪れ、こちらでもやりませんかともちかけたようです。高湯温泉では大いに乗り気になった

のですが、矢吹なる人物は山形市に行ってくるといったまま帰ってきませんでした。おかしいなと思っていると、そのうち山形市で金品をだまし取る詐欺師がでたとして新聞に載ったとのことです。それはそれとして、高湯温泉では大正14年にスキー場開設の機運が盛り上がり、秋田営林署に森林伐採の許可を申請し、大正14年～15年に蔵王温泉スキー場が開設（今のロープーウェイの乗り場付近）されたようです。

⑸　樹氷について

慶応大学山岳部が冬季初踏破した大正10年代には、大学や山岳会がきそって、日本各地の山々の冬季登頂・冬季初踏破を行っていました。その中で、各地で樹氷が見つけられた（認識された）と考えられます。植物学者の田邊和雄氏の手記によると、大正10年代に北海道を始め各地の樹氷を見て歩いたとのことです。大正10年代以降、樹氷を見るために各地を訪れた人はかなり出てきたのではないかと思います。

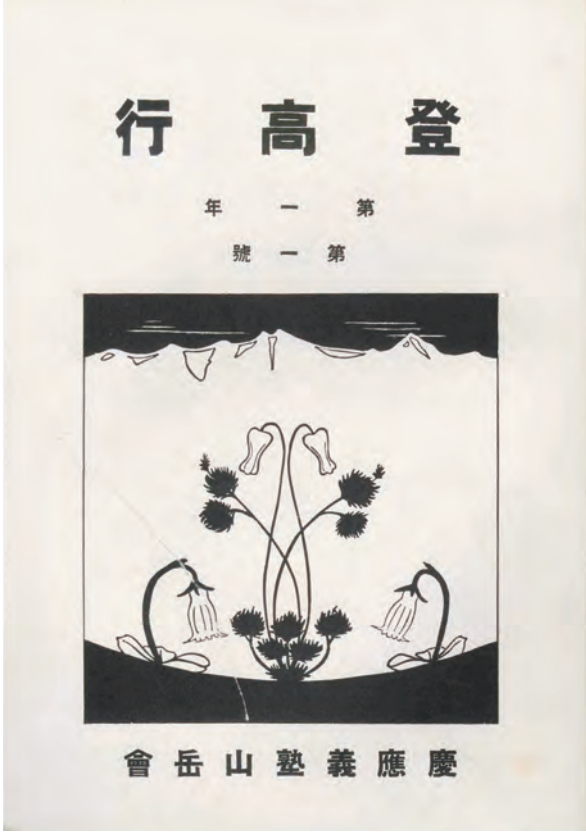


図１　登高行第１年　表紙

図２　登高行第２年　表紙

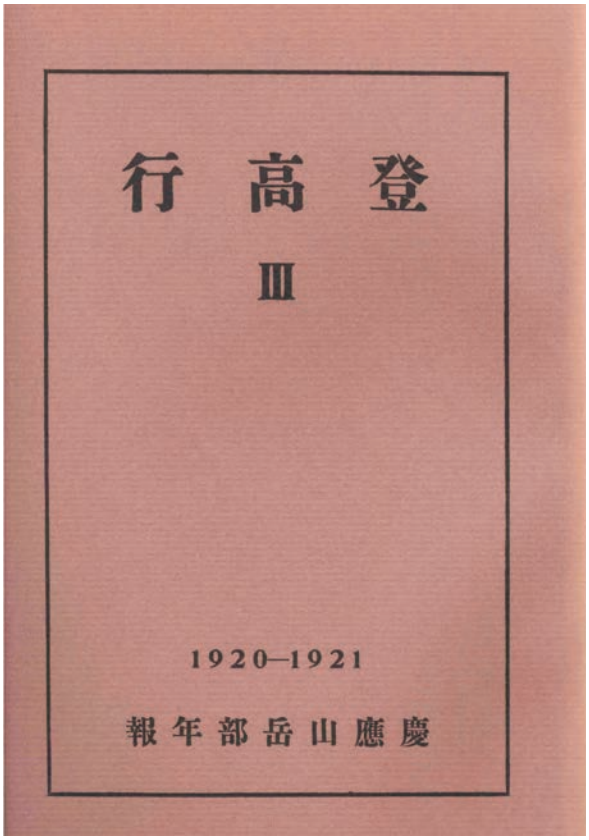
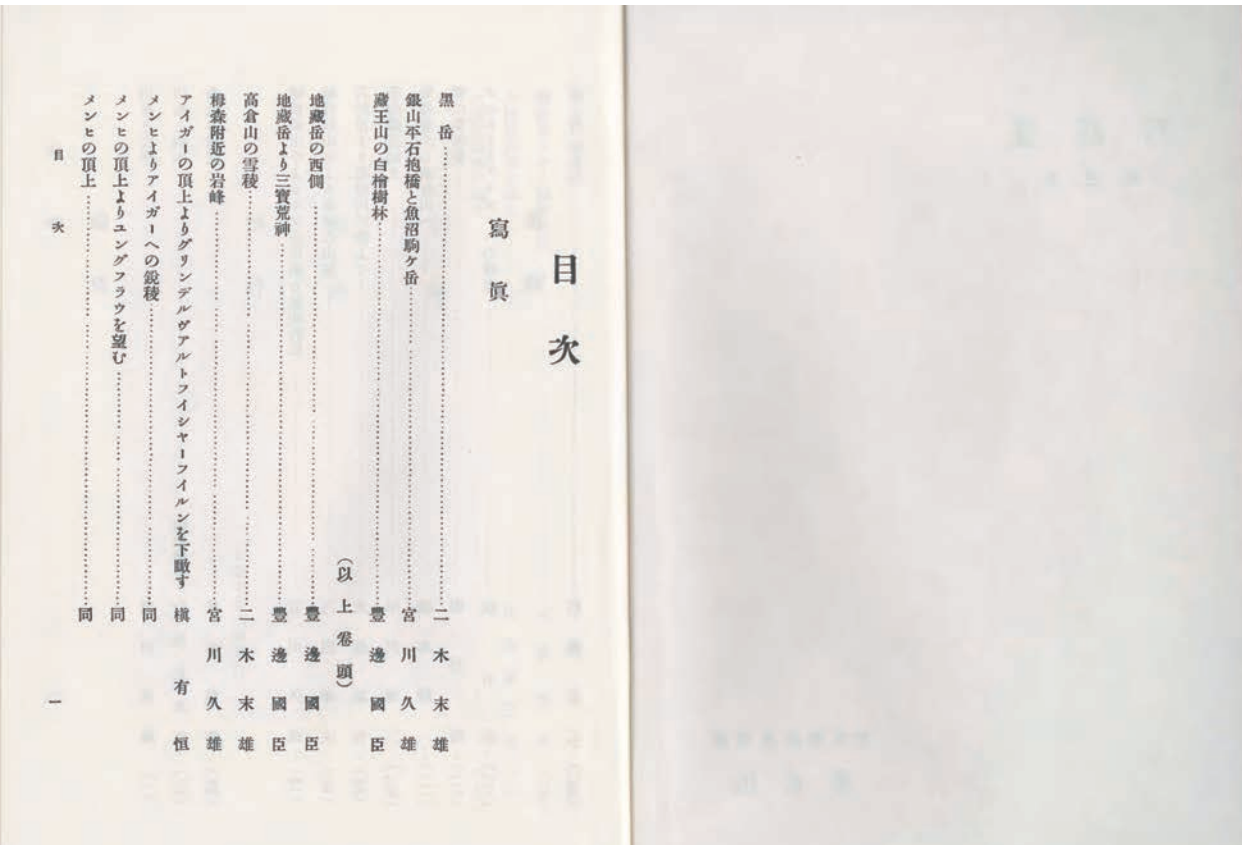


図３　登高行第３年　表紙

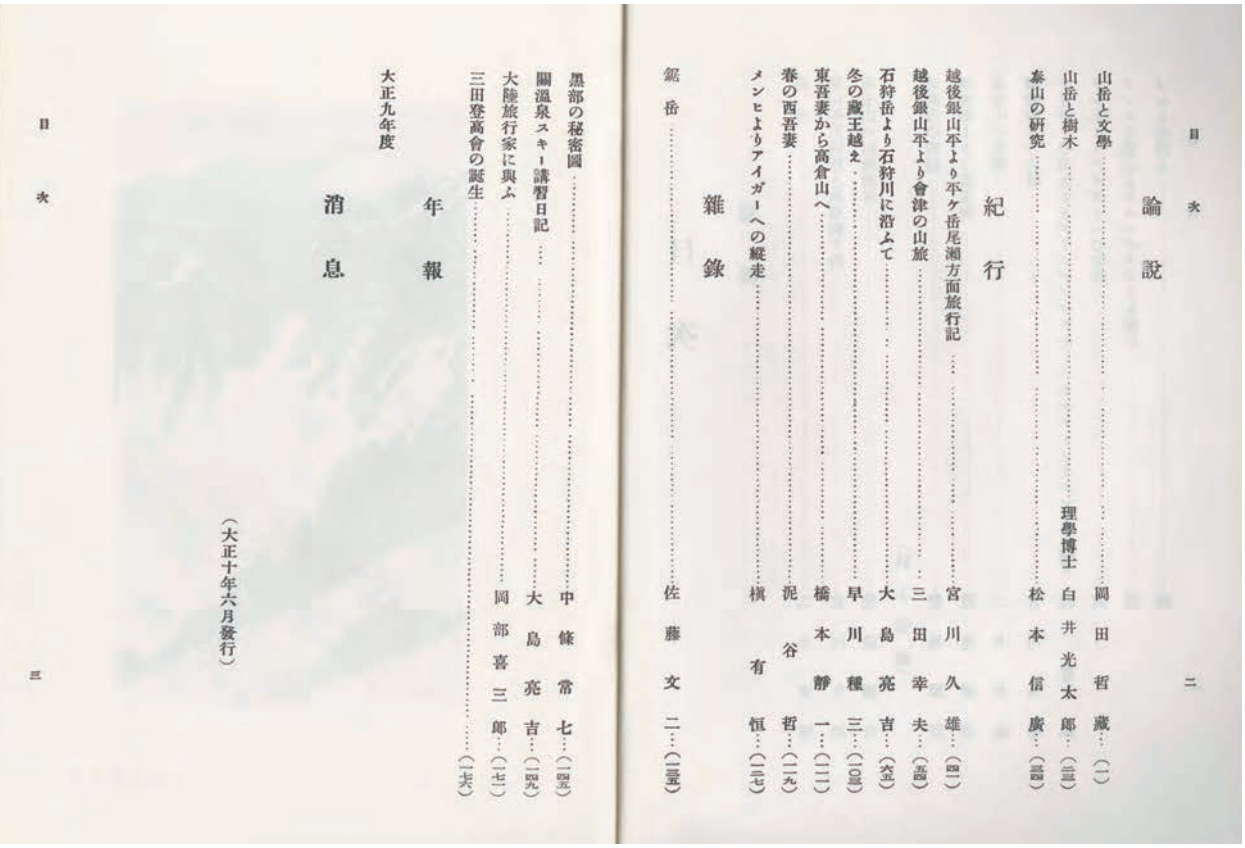


目次

寫眞

黑岳……二木末雄
銀山平石抱橋と魚沼駒ケ岳……宮川久雄
藏王山の白檜樹林……豐邊國臣
（以上卷頭）
地藏岳の西側……豐邊國臣
地藏岳より三寶荒神……豐邊國臣
高倉山の雪稜……二木末雄
樽森附近の岩峰……宮川久雄
アイガーの頂上よりグリンデルヴァルトフイシャーフイルンを下瞰す　横有恒
メンヒよりアイガーへの鋭稜……同
メンヒの頂上よりユングフラウを望む……同
メンヒの頂上……同

図４　登高行第３年　目次１



論說

山岳と文學……岡田哲藏…（一）
山岳と樹木……理學博士　白井光太郎…（三）
泰山の研究……松本信廣…（四）

紀行

越後銀山平より平ケ岳尾瀬方面旅行記……宮川久雄…（四一）
越後銀山平より會津の山旅……三田幸夫…（五四）
石狩岳より石狩川に沿ふて……大島亮吉…（六五）
冬の藏王越え……早川種三…（一〇四）
東吾妻から高倉山へ……橋本靜一…（一一）
春の西吾妻……泥谷哲…（一八）
メンヒよりアイガーへの縱走……横有恒…（一二七）

雜錄

鋸岳……佐藤文二…（一三五）

黑部の秘密國……中條常七…（一四五）
關溫泉スキー講習日記……大島亮吉…（一四九）
大陸旅行家に與ふ……岡部喜三郎…（一七一）
三田登高會の誕生……（一七六）

年報

大正九年度

消息

（大正十年六月發行）

図５　登高行第３年　目次２

地藏沿の西側　　豐邊國崑撮影

冬の藏王越え

早川種三

行程――東北本線白石驛――永野――遠刈田牧場――峨々温泉――刈田嶽――熊野嶽――地藏嶽――三寶荒神山――高湯温泉

藏王山をスキーで登つて見ようと計畫がされて五色温泉に正月三日に集まり行程の事などを相談し合ふた時に鹿子木先生が藏王を越えて山形まで行つたら尙ほ一層愉快であらうと云はれたので吾々もその氣になつて突然其の場で乗越えようと決心したのであつたが熊野嶽迄行く事は夏も二三度登つてをるので自信はあつたが高湯温泉まで下る事は夏に一度しか行つてをらぬので多少不安があつた。それで用意も大分不充分であつた。

今年は雪が少ないので吾々も大分心配したので先生と耳先輩は五色温泉に止まられ吾々だけ遠刈田まで先に行き雪の有無を電報で知らせる事にして五日の午前十時二十九分の汽車で板谷驛を立つた。

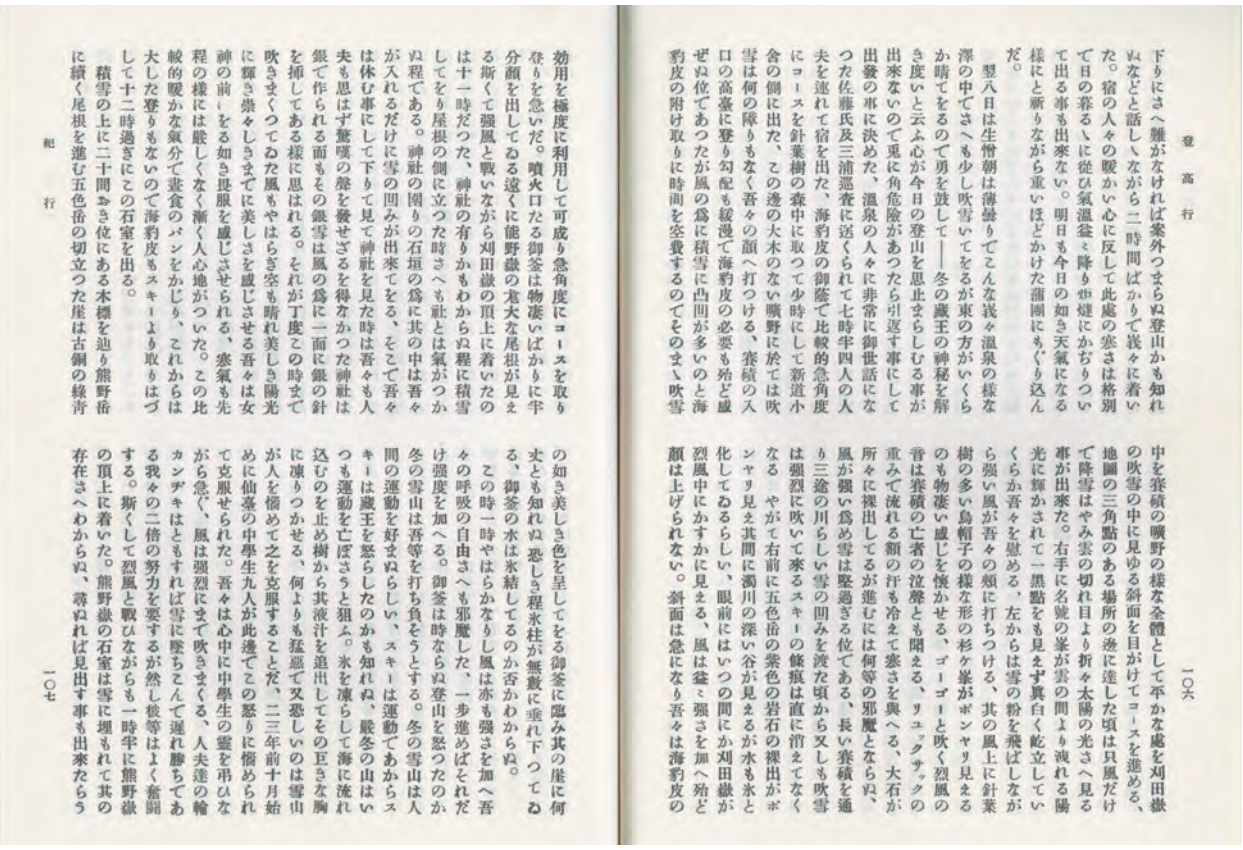
白石驛には二時に着き驛で先輩と落合ふて驛前の乗合自動車でスキーや河豚の腹の様に張切つてをるリュックサックを自動車の踏臺やエンジンに結びつけて田舍町を走らした。白石の町を出てから暫く白石川の北側に沿ひ天氣もよく暖かいのでスキーで登山する様な氣持はなく自動車のエンジンの音を聞きながらウト〳〵したり突然石に車がつきあたり身體が投出されそうになつたりしながら四十分ばかり走らした。桃で名所の宮村を通過したが生憎冬で桃にもありつけないで雜木林の様な桃畑を横目で眺めながら松川の橋にさし掛つた丁度其時は空は一面に晴れ藏王の連山は雪につゝまれてそれが太陽の美しい光をうけて明らかに空の藍色と區別されて嵩々しく輝いて屹立してをる宛も銀の御殿の如きあの姿を見た時は吾々は二三日中にあれを突破するんだ然もスキーでと云ふ感じを懷き今迄の長閉なだれ氣味も一時に緊張した、もう吾々の心は藏王のスロープにあつた。白皚々たる熊野嶽の頂上で單杖を打振り防塵具につゝまれながら歡喜の聲を上げてゐる所を想像しながら永野に三時についた、それから熱海の輕便の様な寧ろそれよりも貧弱な輕便鐵道で三時半遠刈田に向つた、冬の間は一日に二回だけだそうで速力も遲く雪でもあればスキーの方が早い位だ。

やがて五十分間ばかりして遠刈田に着いたがその邊には雪も五六寸位でとてもスキーは穿けそうもない。直ぐ佐藤旅館に行き雪の様子や案内者の事を頼み直ぐ牧場に向つた、少しづゝ雪の量も多くなり吾々も喜んだが右手の龍山の岩が夕陽に真黑く屹立してゐるのも吾々の心配を增さした、少しでも雪が多ければスキーには樂である、やがて二十分ばかりで牧場の事務所に着した、兎に角雪の様子が心配でならぬので暫りをつけて藏王への山道へ出て見たら雪も粉雪で一尺程あり吾々も非常に嬉び早速五色にをられる先生と先輩とに電報を打つた。

案内者の事も萬事遠刈田の佐藤氏に御願みしてあるし雪もよし何等の心配もなく成功を期しながら寢た、翌七日の朝早く代藏氏わざ〳〵來られ案内者の事などを打ち合せをした、今夜か明日午前には先生も先輩も來られるから今日は練習がてらその邊に出る事にして十一時頃から事務所の裏のコンモリ茂つた杉林を出て藏王への山道に道を取つた、濁川に架けられた橋を渡つた頃から雪も多くなつたが今日の天氣の陽氣で雪がスキーにつく事が甚しい、海豹皮をつけてグン〳〵登る、所々に土が露出してをつて不愉快である。樹間より洩れる日光が雪に反映して映しくもあり又熱く汗はシャツと身體の間とを流れる位であつた、牧場の木柵の盡きる頃からは木も針葉樹と變り雪の質もよくスキーにつかず真直に立派な森道を左に澄川の清流と右に濁川の濁水とを見て進む、やがて第一の小舍も過ぎ第二の小舍にて焚火などして一時間ばかり休み、左下に不動瀧が見え殆ど落水は氷結して音さへもかすかにしか聞えぬ。やがて同じ様な緩かな山道を登り峨々温泉の分かれ道に立てられた木標も積雪の上に四五寸しか出てをらぬ。時間も未だ早いので寒積へ山道を急き新道小屋に至る、新道小屋は哀はれにも雪に埋もれて只小舍であることを吾々に點頭かさせるだけである四邊の木は漸く其の高さを減じ刈田嶽に至る間は一大曠野である。風もないけれどもなか〳〵寒い、今迄の道は全く雪の爲に方角さへもわからぬ、南に向つて比較的回凸の少ない所を選んで高臺に登る。昨日永野より見た雪の御殿が眞近く見ゆるのも吾々の登山熱を刺戟するのに充分である。もう少し進み度かつたが時間もないので引返す事にした、粉雪と緩斜面とは吾々の直滑降に恐ろしい迄に速力をつける。十五分ばかりして峨々温泉に着した、温泉宿の心からの歡持を受けこゝで馳走になつたおしるこの味は實際忘るゝ事は出來ぬ程であつた。宿の人々の歡待に時の過ぎるのも知らず、冬季登山の話に身が入つた。今迄同行せられた松本先輩は普通部の授業の八日より始まる爲に明日熊野嶽まで峨々の案内者一人を連れて登られ遠刈田に下らるゝ事となつたので吾々と行動を共にする事が出來ず松本先輩だけ一人殘る事となつた。夕光のかすかな光が尾根の樹氷のみを輝しかけた頃に明日來る事を約して吾々は松本先輩の明日の初登山の成功を祈りながら眞暗な森道を木枯に躓きながら七時半過ぎに牧場に歸つて來た。間もなく靜かな牧場の構もない廣場にオーイッと呼ぶ聲が聞えたので今頃誰が訪れたのだらうと出て見ると先生と耳先輩はスキーとリュックサックとを一頭の駄馬に積ませて立つてをられた永野から輕便がないので歩いて來られたとの事であつた、吾々も今日峨々で松本先輩に分かれた淋しさも先生と耳先輩の來られたので賑かな嬉しい氣分になり深更まで話した。

七日、午前中は又遠刈田の佐藤氏案内者を二人つれてわざ〳〵吾々の登山を心配せられて牧場まで來た、又遠刈田の巡査三浦氏も非常に心配せられ佐藤氏と同行せられ今日我々と共に峨々まで行かれるとの事である、佐藤氏の世話で來た案内者二人は見るから頑丈そうで雪之助、遠之丞と云ふ名で雪之助といふ名は母が雪の中へ產み落した爲につけられた名だそうでムッリとした山男らしき質朴さを表はしてる男だつた。この二人に牧場の牧夫の長助、吉彌の二人をつけて行く事にした。

用意もすつかり出來たので晝食後先生始め吾々と佐藤三浦の兩氏及四人の人夫の大勢で峨々温泉へと昨日の如き熱さを感じながら登つた、途中松本先輩の下山して來るのに會つた、熊野嶽まで行かれ藏王の初登山も成功し案外物足りなさを感じた位だつたとの松本先輩の言葉で吾々も喜び松本君は先を急いでをられるので其儘分かれる、熊野嶽より高湯への



登高行　一〇六

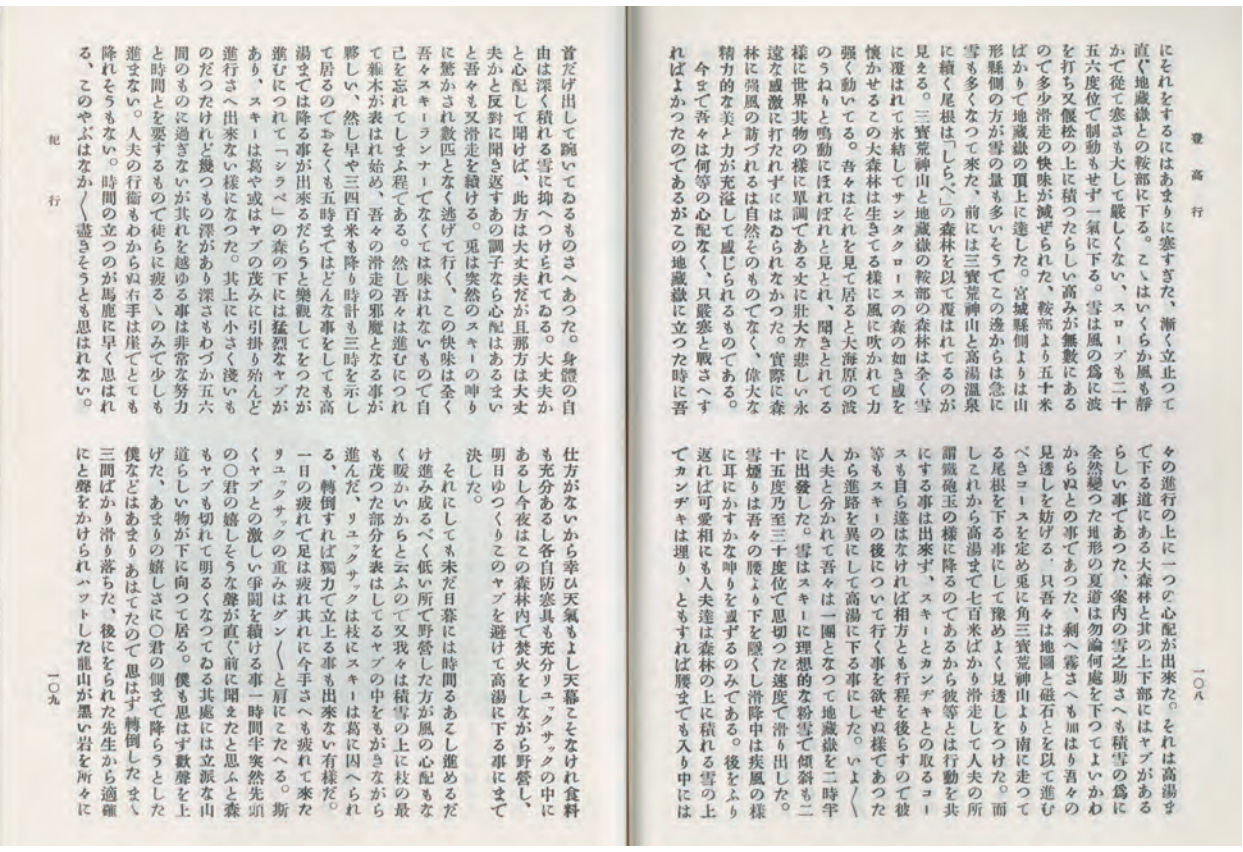
下りにさへ難がなければ案外つまらぬ登山かも知れぬなどと話しゝながら二時間ばかりで裳々に着いた。宿の人々の暖かい心に反して此處の寒さは格別で目の暮るゝに從ひ氣温益々降り亜燈にかぢりついて出る事も出來ない。明日も今日の如き天氣になる樣にと祈りながら重いほどかけた蒲團にもぐり込んだ。

翌八日は生憎朝は薄曇りでこんな裳々温泉の樣な澤の中でさへも少し吹雪いてをるが東の方がいくらか晴てをるので勇を鼓して――冬の藏王の神秘を解き度いと云ふ心が今日の登山を思止まらしむる事が出來ないので兎に角危險があつたら引返す事にして出發の事に決めた、温泉の人々に非常に御世話になつた佐藤氏及三浦巡査に送られて七時半四人の人夫を連れて宿を出た、海豹皮の御陵で比較的急角度にコースを針葉樹の森中に取つて少時にして新道小舎の側に出た、この邊の大木のない曠野に於ては吹雪は何の障りもなく吾々の顔へ打つける、寒磧の入口の高臺に登り勾配も緩漫で海豹皮の必要も殆ど感ぜぬ位であつたが風の爲に積雪に凸凹が多いのと海豹皮の附け取りに時間を空費するのでそのまゝ吹雪中を寒磧の曠野の樣な全體として平かな處を刈田嶽の吹雪の中に見ゆる斜面を目がけてコースを進める、地圖の三角點のある場所の邊に達した頃は只風だけで降雪はやみ雲の切れ目より折々太陽の光さへ見る事が出來た。右手に名號の峯が雲の間より洩れる陽光に輝かされて一黒點をも見えず眞白く屹立していくらか吾々を慰める、左からは雪の粉を飛ばしながら強い風が吾々の頬に打ちつける、其の風上に針葉樹の多い鳥帽子の樣な形の杉ケ峯がボンヤリ見えるのも物凄い感じを懐かせる、ゴーゴーと吹く烈風の音は寒磧の亡者の泣聲とも聞える、リュックサックの重みで流れる額の汗も冷えて寒さを與へる、大石が所々に裸出してるが進むには何等の邪魔とならぬ、風が強い爲め雪は堅過ぎる位である、長い寒磧を通り三途の川らしい雪の凹みを渡た頃から又しも吹雪は强烈に吹いて來るスキーの條痕は直に消えてなくなる　やがて右前に五色岳の紫色の岩石の裸出がボンヤリ見え其間に濁川の深い谷が見えるが水も氷と化してゐるらしい、眼前にはいつの間にか刈田嶽が烈風中にかすかに見える、風は益々强さを加へ殆ど顔は上げられない。斜面は急になり吾々は海豹皮の効用を極度に利用して可成り急角度にコースを取り登りを急いだ。噴火口たる御釜は物凄いばかりに半分顔を出してゐる遠くに能野嶽の尤大な尾根が見える斯くて强風と戰いながら刈田嶽の頂上に着いたのは十一時だつた、神社の有りかもわからぬ程に積雪してをり屋根の側に立つた時さへも社とは氣がつかぬ程である。神社の圍りの石垣の爲に其の中は吾々が入れるだけに雪の凹みが出來てをる、そこで吾々は休む事にして下りて見て神社を見た時は吾々も人夫も思はず驚嘆の聲を發せざるを得なかつた神社は銀で作られる面もその銀雪は風の爲に一面に銀の針を挿してある樣に思はれる。それが丁度この時まで吹きまくつてゐた風もやはらぎ空も晴れ美しき陽光に輝き燦々しきまでに美しさを感じさせる吾々は女神の前にをる如き畏服を感じさせられる、寒氣も先程の樣には厳しくなく漸く人心地がついた。この比較的暖かな氣分で晝食のパンをかじり、これからは大した登りもないので海豹皮もスキーより取りはづして十二時過ぎにこの石室を出る。

積雪の上に二十間おき位にある木標を辿り熊野岳に續く尾根を進む五色岳の切立つた崖は古銅の綠青の如き美しき色を呈してをる御釜に臨み其の崖に何丈とも知れぬ恐しき程氷柱が無數に垂れ下つてゐる、御釜の水は氷結してるのか否かわからぬ。

この時一時やはらかなりし風は亦も强さを加へ吾々の呼吸の自由さへも邪魔した、一歩進めばそれだけ强度を加へる。御釜は時ならぬ登山を怒つたのか冬の雪山は吾等を打ち負そうとする。冬の雪山は人間の運動を好まぬらしい、スキーは運動であからスキーは藏王を怒らしたのかも知れぬ、厳冬の山はいつも運動を亡ぼさうと狙ふ。氷を凍らして海に流れ込むのを止め樹から其液汁を追出してその巨きな胸に凍りつかせる、何よりも猛惡で又恐しいのは雪山が人を惱めて之を克服することだ、二三年前十月始めに仙臺の中學生九人が此邊でこの怒りに惱められて克服せられた。吾々は心中に中學生の靈を弔ひながら急ぐ、風は强烈にまで吹きまくる、人夫達の輪カンヂキはとまれば雪に墜ちこんで遅れ勝ちである我々の二倍の努力を要するが然し彼等はよく奮闘する。斯くして烈風と戰ひながらも一時半に熊野嶽の頂上に着いた。熊野嶽の石室は雪に埋もれて其の存在さへわからぬ、尋ぬれば見出す事も出來たらう

図８　登高行第３年　手記の３



登高行　一〇八

にそれをするにはあまりに寒すぎた、漸く立止つて直ぐ地藏嶽との鞍部に下る。こゝはいくらか風も靜かで從て寒さも大して厳しくない、スロープも二十五六度位で制動もせず一氣に下る。雪は風の爲に波を打ち又偃松の上に積つたらしい高みが無數にあるので多少滑走の快味が滅ぜられた、鞍部より五十米ばかりで地藏嶽の頂上に達した。宮城縣側よりは山形縣側の方が雪の量も多いそうでこの邊からは急に雪も多くなつて來た、前には三寶荒神山と高湯温泉に續く尾根は「しらべ」の森林を以て覆はれてるのが見える。三寶荒神山と地藏嶽の鞍部の森林は全く雪に覆はれて氷結してサンタクロースの森の如き感を懐かせるこの大森林は生きてる樣に風に吹かれて力强く動いてる。吾々はそれを見て居ると大海原の波のうねりと鳴動にほれぼれと見とれ、聞きとれてる樣に世界其物の樣に單調である丈に壯大な悲しい氷遠な感激に打たれずにはゐられなかつた。實際に森林に强風の訪づれるは自然そのものでなく、偉大な精力的な美と力が充溢して感じられるものである。

今まで吾々は何等の心配なく、只厳寒と戰さへすればよかつたのであるがこの地藏嶽に立つた時に吾々の進行の上に一つの心配が出來た。それは高湯まで下る道にある大森林と其の上下部にはヤブがあるらしい事であつた、案内の雪之助さへも積雪の爲に全然變つた地形の夏道は勿論何處を下つてよいかわからぬとの事であつた、剩へ霧さへも加はり吾々の見透しを妨げる、只吾々は地圖と磁石とを以て進むべきコースを定め兎に角三寶荒神山より南に走つてる尾根を下る事にして豫めよく見透しをつけた。而しこれから高湯まで七百米ばかり滑走して人夫の所謂鐵砲玉の樣に降るのであるから彼等とは行動を共にする事は出來ず、スキーとカンヂキとの取るコースも自ら違はなければ相方とも行程を後らすので彼等もスキーの後について行く事を欲せぬ樣であつたから進路を異にして高湯に下る事にした。いよ／＼人夫と分かれて吾々は一團となつて地藏嶽を二時半に出發した。雪はスキーに理想的な粉雪で傾斜も二十五度乃至三十度位で思切つた速度で滑り出した。雪煙りは吾々の腰より下を隠くし滑降中は疾風の樣に耳にかすかな呻りを感ずるのみである。後をふり返れば可愛相にも人夫達は森林の上に積れる雪の上でカンヂキは埋り、ともすれば腰までも入り中には仕方がないから幸ひ天氣もよし天幕こそなけれ食料も充分あるし各自防寒具も充分ユックサックの中にあるし今夜はこの森林内で焚火をしながら野營し、明日ゆつくりこのヤブを避けて高湯に下る事にして決した。

それにしても未だ日暮には時間るあること進めるだけ進み成るべく低い所で野營した方が風の心配もなく暖かいからと云ふので又我々は積雪の上に杖の最も茂つた部分を表はしてるヤブの中をもがきながら進んだ、リュックサックは枝にスキーは葛に因へられる、轉倒すれば獨力で立上る事も出來ない有樣だ。一日の疲れて足は疲れ其れに今手さへも疲れて來たリュックサックの重みはグン／＼と肩にこたへる。斯くヤブとの激しい爭闘を續ける事一時間半突然先頭の○君の嬉しそうな聲が直ぐ前に聞えたと思ふと森もヤブも切れて明るくなつてゐる其處には立派な山道らしい物が下に向つて居る。僕も思はず歓聲を上げた、あまりの嬉しさに○君の側まで降らうとした僕などはあまりあはてたので思はず轉倒したまゝ三間ばかり滑り落ちた、後にをられた先生から適確にと聲をかけられハットした龍山が黒い岩を所々に

図９　登高行第３年　手記の４

登高行　一一〇

出して巍峨として屹立して吾々の眼下には高湯の温泉村が明かに見え二十分位で滑降が出來そうであるので今迄のヤブとの爭も忘れ高湯へ着したも同樣と嬉び合ふた　と見れば其の邊にはカンジキの痕さへあり人夫等の降つたものらしくこれで彼等も安全に下るを得たと再び安心した。

そうすると下の澤から人夫の呼ぶ聲が聞えて來た彼等も吾々を大分心配してをつたらしい。安心し切つた吾々はこれから此の澤へおりて澤傳ひに高湯に行くのは痛快な事でなく今度は高湯も眼下に見ゆる事だし安心の滑走するコースを取つた方が如何に愉快な事であるかと思はれたので成る可く長い斜面はないかと見ると左の方に續く尾根は木もヤブもなくよさそうなので澤へ下るのは正當な道であるけれど少し遠廻して其の尾根を下る事にした。やがて尾根を滑走し出して見るとスロープも廣く雪も多く吾々は始めて心配なしに出來るだけの速力を出し今迄の疲れも忘れ剩へ雪の藏王をたつた今乘越して山形縣へ向つて居ると云ふ得意な心も加はりスキーの走る速力に身體を委した、然し、地圖や又見た所で思考したよりも非常な迂回で且に顏さへも判じ難くなつた暗さになつても高湯温泉の燈りは少しも近くならずマッチの火で見ると時計が七時を示し四邊は眞暗くかすかに雪明りをたよりに進んだ、先程の樂觀も亦消えかゝつて來た、然し今此處で躊躇する場合でないのでドン〳〵進んだ、少さな杉苗があるばかりで滑走には何等の邪魔とはならず道は早く進む事が出來たが高湯の燈りが眞下に見ゆる樣になつた時は眞暗で雪明りもなくなり下にはゴーゴー流るゝ河があり眞暗で木の根か或は岩石か判明もつかず一つの燈りを頼りに少しづゝ注意しながら下つた、然し橋の有りかもわからぬこの河を如何して渡つてよいか決しかねた、空腹も急に感じ始め疲れも夜の寒氣も吾々の不安の度を增さしめる助としかならなかつた。高湯の村を眺めながら敢て危險を犯かし萬一な事があつては折角の今迄の成巧も何にもならぬもので下にをる人夫に合圖してこの河の橋の場所を示して貰ふ時はなく燈りやラッパで合圖した、その合圖が人夫のみならず高湯の人にも聞えて灯燈を以て向ひに來て呉れたので我々も難なく高湯温泉に着く事が出來た宿に着いたのは丁度八時であつた。

今日苦んだヤブも始めからもう少し上手にコース

を取つたらあんなにまで苦しまずに降れたらうと思はれる、然しあの森林は人夫に後から聞いても宿の人に聞いても避け得られないそうである。吾々と分れた人夫立も吾々と同樣苦しめられ首まで雪に埋もれた事は各二三度づゝあつたそうで雪國の猟師でさへもあんな苦しをはしたのは初めてであるそうだ。然し彼等がカンヂキの爲に雪に埋もれたのであらうがあの樣な猛烈なヤブは返つてカンヂキの方がよい樣で又彼等は荷物を殆どなかつた爲に吾々より早く降れたのであるもうこゝまで來れば冬の藏王越も濟んだと同樣だ、炬燵に入りながら互に失敗談やら自慢話やらで話に花が咲いた。

九日、十一時頃昨日苦しめられた森林を顧りみながら上ノ山に向つた、上ノ山で先生の御友人の加藤氏に夕食の御馳走となり其夜は山形まで汽車で行き加藤氏の御宅で一晩厄介となつた。

翌朝O君と二人で吾妻山を登山する爲一行とわかれて庭坂驛に向つた。

東吾妻から高倉山へ

此行は福島市の西方約五里に在る日本脊梁山脈の東吾妻山に登り一切經より家形山を經て高倉の東麓に出で五色温泉迄を踏破するのが目的である。

二月九日　上野驛發――微温湯宿泊

行く者五人は五六人の部員に見送られて座席を充分に取り樂々と出發し得ることゝなつた、車の内と外とでは用談雜談に花が咲いてる、雪山は既に吾等の眼前に迫り心は雪深き森の中を彷徨ふて居る、贈られた果物は皆の心を喜ばせた。翌朝未明晴れて寒むい庭坂驛で下車且は該行最初の割金問題を惹起して一行からしぼられるイタラ捜しても上野からの乘車券が無いのだ改札からは二等賃金の倍額だと驚かされる睡氣も何處へやらやつと許してもらつてほつとする。

朝まだき出發、雪が無いのでスキーは各自の肩に乘せカン〳〵に氷つた道を歩く再來のOが道を失し

高倉山の雪稜　二木末雄撮影

厩王山の白樺樹林　　豊澄國臣　撮影

図12　登高行第３年　樹氷写真１

登高行　一〇二

まで行つて泊ることになつた。自分等は今この二人の山人と別れる時に全くそれに對して無關心な平靜な心境を持して居られなかつた。十數日間の間同じ勞苦と悅樂を共に頒ち、幾夜となく共に焚火を圍んで土に寢た此等の人々と自分等との間は決してたゞに契約に依つて一方が支拂ふ賃錢に對して、他方がその報酬として勞役を提供すると言つた樣な冷たく簡單なものではなかつた。少なくともこの兩者の關係はより複雜なものであつた。多少なりとも相互の心と心は觸れ合ふことが出來るものであつた。慥かに相互に一致を見出すべき幾つかの共鳴點はあつた筈である。自分等の前途の旅程の地に廻送を託した荷などを再び背にして彼等のまたと邂逅ふ機會もなさそうな、その去りゆく姿を街角に消えるまで凝つと校舍の前庭にあつて自分等二人が見送つてゐると、其處に自ら「哀愁離苦」と言つた樣うな感傷的な情緒が胸に湧き上るのを覺へるのであつた。そしてその視線をやゝ西に轉じた時、より强い衝撃が自分等を打つた。丁度血潮の如く昂奮した眞紅の色に染まつた夕燒けの西空には、日沒の最後の微光に火焰の如くその峰々の頂部を燃え立たせた、ヌタクカムウシュペとニセイカウシュペが明確な力强い外廓線を浮べて、それが一秒一秒に濃い暗紫色に冷たく褪め薄れてゆくのであつた。殆んど立ち竦む樣にしてまた自分等の視線は其處から少時の間動かなかつた。

× × ×

翌日自分等は北見峠を越えて、湧別川の流れに沿ひつゝ、冷たい霧深い北見の海岸へと旅程を辿つていつた。（終り）

図13　登高行第３年　樹氷写真２

冬の藏王越え

早川種三

行程——東北本線白石驛——永野——遠刈田牧場——峰々温泉——刈田嶽——熊野嶽——地蔵嶽——三寶荒神山——高湯温泉

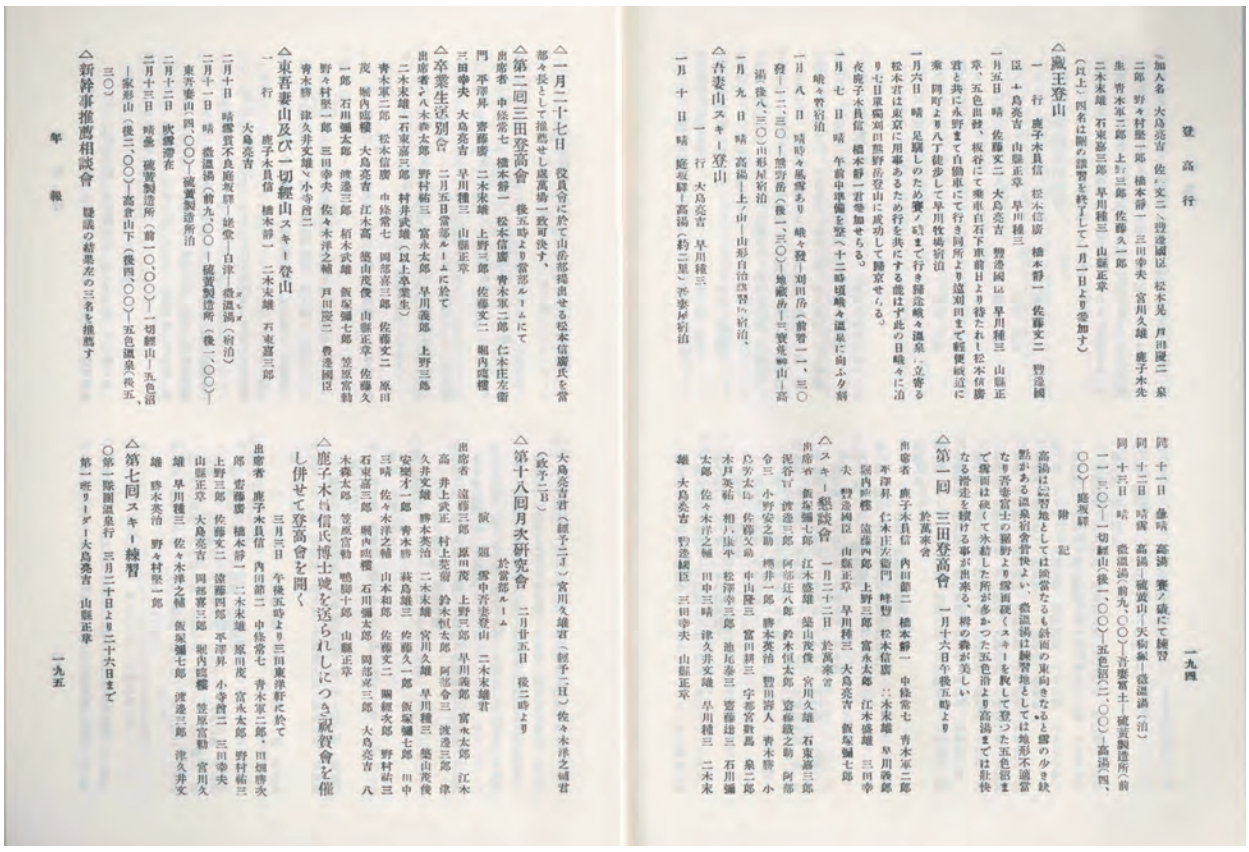
藏王山をスキーで登つて見ようと計畫がされて五色温泉に正月三日に集まり行程の事などを相談し合ふた時に鹿子木先生が藏王を越えて山形まで行つたら尚ほ一層愉快であらうと云はれたので吾々もその氣になつて突然其の場で乘越えようと決心したのであつたが熊野嶽迄行く事は夏も二三度登つてをるので自信はあつたが高湯温泉まで下る事は夏に一度しか行つてをらぬので多少不安があつた。それで用意も大分不充分であつた。

今年は雪が少ないので吾々も大分心配したので先生と耳先輩は五色温泉に止まられ吾々だけ遠刈田まで先に行き雪の有無を電報で知らせる事にして五日の午前十時二十九分の汽車で板谷驛を立つた。

白石驛には二時に着き驛で先輩と落合ふて驛前の乘合自動車でスキーや河豚の腹の樣に張切つてをるリュックサックを自動車の踏臺やエンジンに結びつけて田舍町を走らした、白石の町を出てから暫く白石川の北側に沿ひ天氣もよく暖かいのでスキーで登山する樣な氣持はなく自動車のエンジンの音を聞きながらウト〳〵したり突然石に車がつきあたり身體が投出されそうになつたりしながら四十分ばかり走らした。桃で名所の宮村を通過したが生憎冬で桃にもありつけないで雜木林の樣な桃畑を横目で眺めながら松川の橋にさし掛つた丁度其時は空は一面に晴れ藏王の連山は雪につゝまれてそれが太陽の美しい光をうけて明らかに空の藍色と區別されて嵩々しく輝いて屹立してをる宛も銀の御殿の如きあの姿を見た時は吾々は二三日中にあれを突破するんだ然もスキーでと云ふ感じを懷き今迄の長閑なだれ氣味も一時に緊張した、もう吾々の心は藏王のスロープにあつ

紀行　一〇三

図14　登高行第３年　樹氷写真３



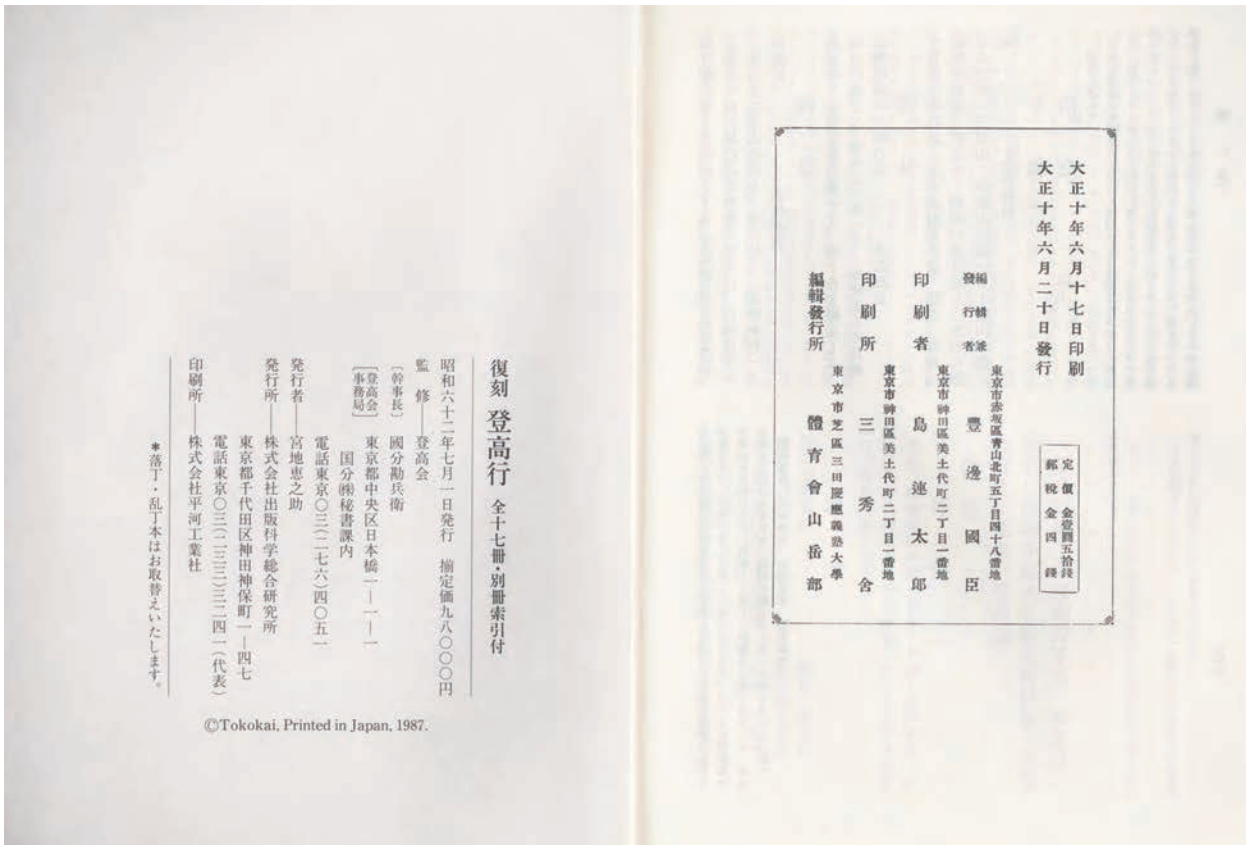
登高行

一九四

年報

一九五

図15　登高行第３年　登山行程



大正十年六月十七日印刷
大正十年六月二十日發行

定價 金壹圓五拾錢
郵稅 金四錢

編輯兼發行者 東京市赤坂區青山北町五丁目四十八番地 豐邊國臣
印刷者 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍
編輯發行所 東京市芝區三田慶應義塾大學 體育會山岳部

復刻 登高行 全十七冊・別冊索引付

昭和六十二年七月一日発行 揃定価九八〇〇〇円
監修——登高会
〔幹事長〕國分勘兵衛
〔登高会事務局〕東京都中央区日本橋一—一—一
国分㈱秘書課内
電話東京〇三(二七六)四〇五一
発行者——宮地恵之助
発行所——株式会社出版科学総合研究所
東京都千代田区神田神保町一—四七
電話東京〇三(二三二)三二四一(代表)
印刷所——株式会社平河工業社

＊落丁・乱丁本はお取替えいたします。

©Tokokai, Printed in Japan, 1987.

図16　登高行第３年　奥付

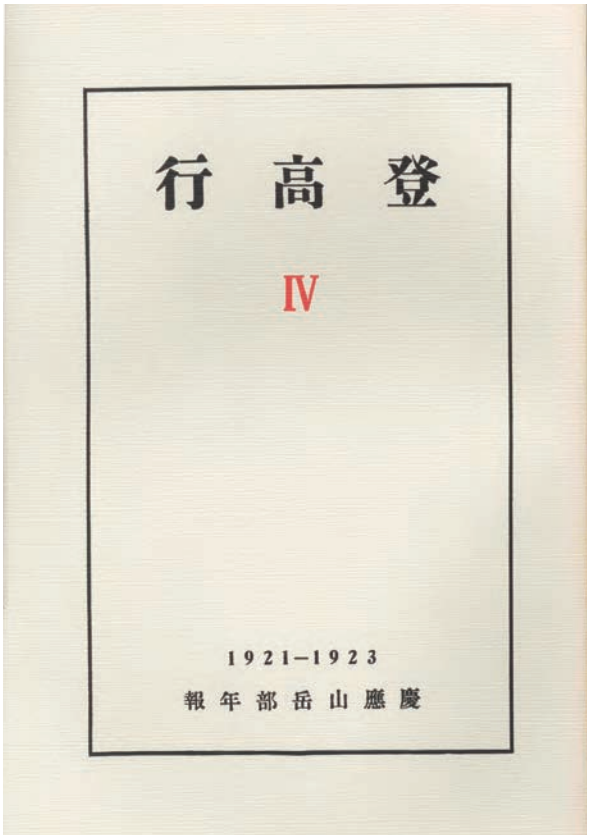


図17　登高行第４年　表紙

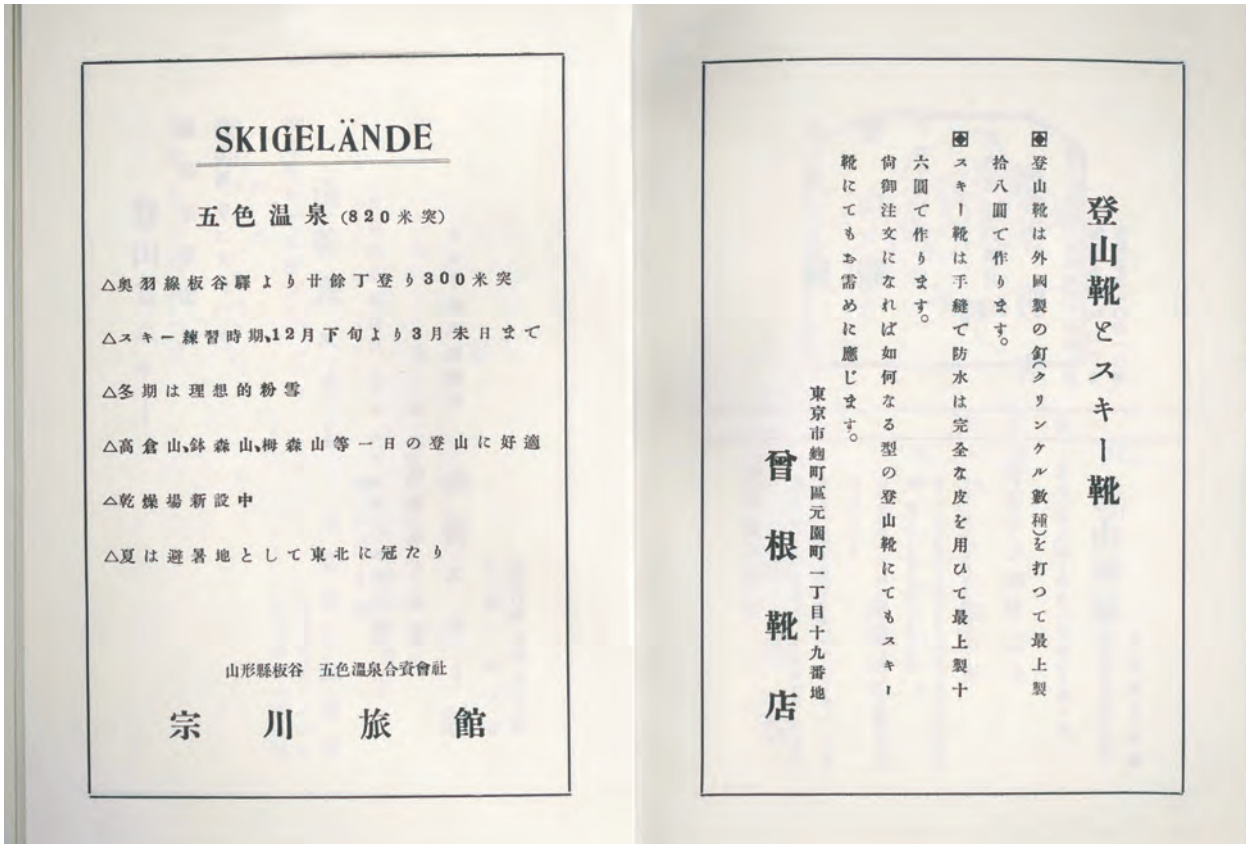


図18　登高行第４年　宗川旅館広告　樹氷なし

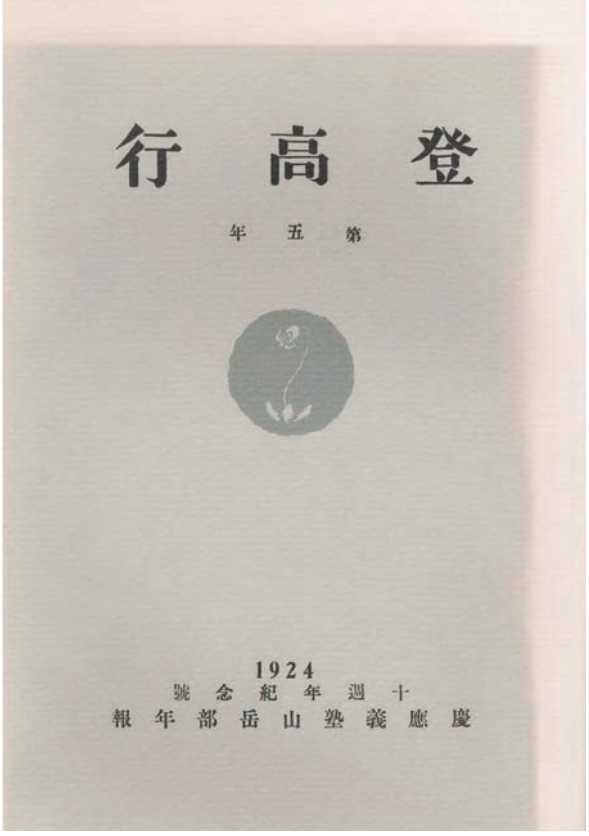


図19　登高行第５年　表紙

藏王山下のスキーゲレンデ

藏王山群も近來漸くスキーゲレートとして紹介されることが知られ、スキー登山者も次第に增して來ました。それで今冬は更にスキーゲレンデとして藏王山麓に二ヶ所の地を選定して人工的な施設をなし、その完全を計ることになりました。

そのひとつは蔵ノ嶽の大斜面で、標高凡そ一二〇〇m、理想的な滑走斜面の連續と、いつも立派な粉雪をもつてゐます。他のひとつは清水原で、これも廣大な斜面で特にアンフェンガーのための絶好な滑走斜面であります。この二ヶ所にスキーヒュッテを建設致しました。

他に藏王山群は最も美しいスキートゥレンを提供する北藏王と未だシーロイファーには未知の魅力をもつ南藏王とがあります。スキー練習者、スキー登山者のために温泉組合はあらゆる御便宜を計りたいと存じます。

東北第一ラヂューム温泉
宮城縣遠刈田温泉
遠刈田温泉組合

小谷温泉

海拔八八〇m

スキー登山地としての妙高裏山。
穂山(二四〇〇・三m)、天狗原山(二一九七・一m)のごときは最も理想的なスキーギッフェル。
乙見山峠越え。雁ヶ峯の高原のホーエンワンデルング。
其他温泉を中心としての未だ試みられざる多くのスキート。ーレン、タールワンデルングのたのしさ。
小谷温泉——白馬登山口、四ヶ谷より北方四里。信越線田口驛より西方七里。谷間の靜かな温泉。スキー登山への唯一の出發地。尙ほ温泉近くにもスキーゲレンデ、シュプルングシャンツ。があります。心あるシーロイファーのこの未だ知られざるスキー登山地に最初のシュプールを印されんことを望んで居ります。

長野縣北安曇郡　小谷温泉
大湯元　山田旅館

図20　登高行第５年　遠刈田温泉組合広告

信夫高湯温泉（海拔八〇〇m）

吾妻山群へのスキートウーレンの最良の發足地。
家形山（一八〇〇m）の頂上高原とその樺のあひだのワルトアプファルト
五色温泉には一日行程の價値あるスキートウール。
一切經山（一九四九m）の圓頂。北他奥吾妻の立派なスキートウーレン。
高湯温泉――福島平野の展望開闊。豐富な湧出量で適温。
庭坂驛より三時間。スキーにて冬季は庭坂より登行し得。スキー登山の
お方は特遇致します。

福島縣信夫郡庭坂高湯温泉
吾妻屋

峨々温泉（海拔八〇〇m）

蔵王山麓へのスキー登山の最良の出發地。
靜かな雪に埋もるゝ谷間の温泉！
蔵王山主峯熊野岳（1・840m）へは適當な一日のスキー登山。理想的
な滑走斜面の連續。
絶好なスキーグレンデとしての賽ノ磧の山上高原へは温泉より僅か一時
間半。
北他未だ試みられざる多くのスキー登山の行程をその周圍にもつてゐ
ます。
冬季は常に理想的な粉雪！
蔵王を越えて山形縣高湯へ、また上ノ山へはいづれも一日行程の美しい
立派なスキートウーレン。
東北本線大河原驛より遠刈田までは輕便鐵道。遠刈田より二里餘。
上野驛夜行に乘車すれば翌朝九時遠刈田着。それよりスキーにて登行三
時間。

図21　登高行第５年　峨々温泉・吾妻屋広告

赤城山（海拔一八二三m）

赤城の春と夏と秋。この三つの時節には實に赤城は我國では他にたぐ
ひのない、輕い、上品な、ゆつたりした山歩きにいゝ山であります。
三月の黄いろな枯草の斜面にのこる斑ら雪。名もない木々の芽ぐみ
ざかり。八月の山上の青い草原に立つ白樺の木蔭。草はむ放牧の牛の群
れ。その牧歌的點景。雲の美しい山の夕べ。十月の澄んだ大氣に浮ぶ山
麓。小さい谷蔭の山菊と龍膽の花ざかり。山上にしづかに歩みてゐる
小さな湖。
赤城の冬。大沼、小沼のスケート。スキーでの小さい山歩き。是非冬
にも、スケートをたづさへ、スキーをはいて、山上の湖畔に靜かに雪に
埋もれてゐるあの小さな旅舍を訪れ下さい。

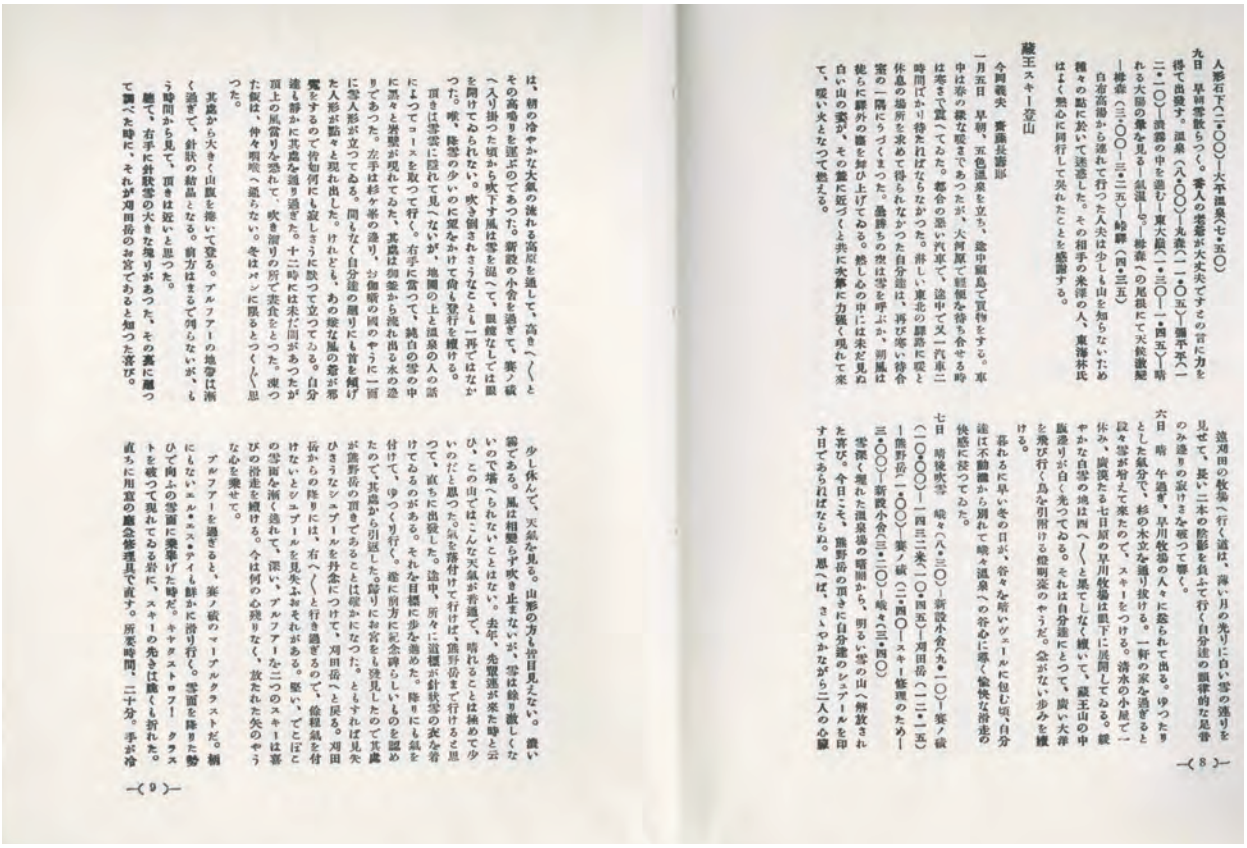
吾妻山群
トーピゲーキス

スキーゲビートとしての吾妻山群！
日本のシュワルツワルト！
そして、まるでバイエルンの山のなかの温泉場を思はせる
やうな五色温泉！
鉢盛（1、003m）の圓頂とその樹氷のかげに日を浴びて
のスキーラスト。
高倉山（1、449m）の波うつ雪庇の鋭い頂稜とその頂よ
りの壮大な山々の展望。
梅盛（1、628m）の雪に埋もる樅の森とその廣やかな頂
上高原。
その他數多くの美しいスキートウーレンの最上の出發點。

宗川旅館
山形縣板谷五色温泉

図22　登高行第５年　宗川旅館広告　樹氷あり

図23　登高行第６年　表紙



人形石下(二・〇〇)—大平温泉(七・五〇)
九日　早朝雪散らつく。養人の雲霧が大火災ですとの言に力を得て出發す。温泉（八・〇〇）—丸森（一・〇五）—猫平平（一二・一〇）—濕原の中を進む—東大森（一・三〇）—一・四五）—晴れる大岳の尾根見る—狐温—号—峠森（四・三五）
—桝森（三・〇〇—三・二五）—峠森（四・三五）
自布高湯から誘れて行つた人夫は少しも山を知らないため難々の點に於いて迷惑した。その相手の米澤の人、東海林氏はよく無心に同行して呉れたことを感謝する。

蔵王スキー登山

今岡義夫　齋藤長壽郎

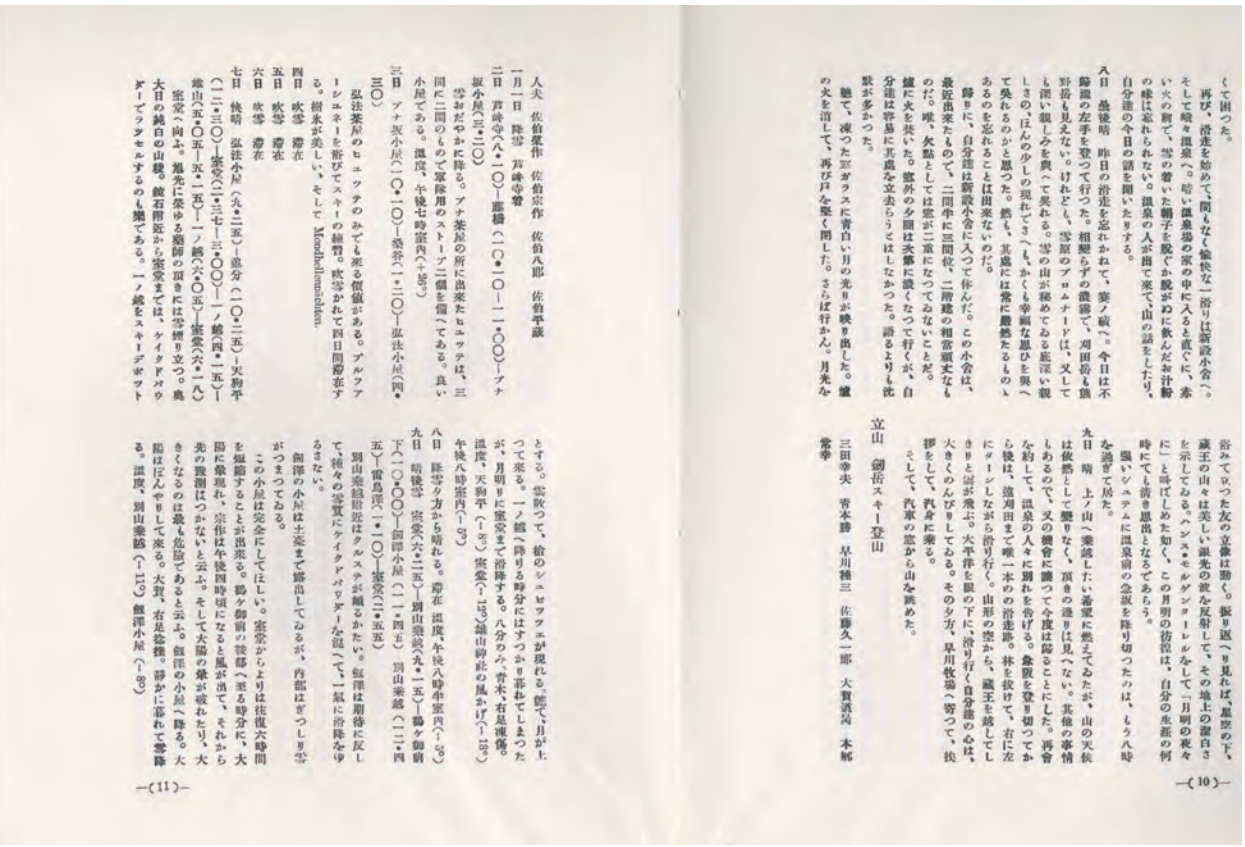
一月五日　早朝、五色温泉を立ち、途中鎧島で買物をする。車中は寒さの緩な暖さであつたが、大河原で軽便なる待ち合せる時は寒さで震へてゐた。都合の悪い汽車で、途中で又一汽車二時間ばかり待たねばならなかつた。淋しい東北の鄙路に暖と休息の場所を求めて得られなかつた自分達は、再び寒い待合室の一隅にうづくまつた。農婦ちの噂は雪を呼ぶか、朔風は徒らに肌外の膚を刺ひ上げてゐる。然し心の中には未だ見ぬ白い山の姿が、その雲に近づくと共に次第に力強く現れて来て、暖い火となつて燃える。

遠刈田の牧場へ行く道は、海い月の光りに白い雪の遥りを見せて、長い二本の陰影を負ふて行く自分達の調律的な足音のみ澄りの寂けさを破つて響く。
六日　晴　午過ぎ、早川牧場の人々に送られて出る。ゆつたりとした紙分で、杉の木立な縫り抜ける。一軒の家を過ぎると段々雪が殖えて来たので、スキーをつける。清水の小屋で一休み、廣漠たる七日原の早川牧場は眼下に展開してゐる。緩やかな白雪の塊は西へ〳〵と暮てしなく續いて、蔵王山の中腹遥りが白く光つてゐる。それは自分達によつて、廣い大洋を飛び行く鳥な引附ける燈明塔のやうだ。念がない歩みを續ける。
暮れると早い冬の日が、谷々な暗いヴェールに包む頃、自分達は不動橋から別れて暖々温泉への谷心に導く愉快な滑走の快感に浸つてゐた。
七日　晴後吹雪　暖々（八・三〇）—新設小会（九・一〇）—寒ノ硫（一〇・〇〇）—一四三二米（一〇・四五）—刈田岳（一二・一五）—熊野岳（一・〇〇）—寒ノ硫（二・四〇）—スキー修理のため—三・〇〇）—新設小会（三・二〇）—暖々（三・四〇）
雪深く埋れた温泉場の暗闇から、明るい雪の山へ解放された喜び。今日こそ、熊野岳の頂きに自分達のシュプールを印す日であらねばならぬ。思へば、さゝやかながら二人の心臓

は、朝の冷やかな大氣の流れる高原を通して、高き〳〵とその高鳴りを逞ぶのであつた。新設の小舎を過ぎて、寒ノ硫へ入り掛つた頃から吹下す風は雪を混ぜて、眼鏡なしでは眼を開けてゐられない。吹き倒されさうなことと一再ではなかつた。嘆、降雪の少いのに驚みかけて尚も登行を續ける。
頂きは雪雲に閉れて見へないが、地圖の上と温泉の人の話によつてコースを取つて行く。右手に雪つて、純白の雪の中に黒々と岩壁が現れてゐた、其處は御釜から流れ出る水の塗りであつた。左手は杉ケ峯の連り、お御殿の國のやうに一面に雪人形が立つてゐる。間もなく自分達の眼りにも首を傾げた人形が點々と現れ出した。けれども、あの嫌な風の音が邪魔をするので何もも寂しさうに欺つて立つてゐる。自分達し静かに其處を通り過ぎた。十二時には未だ間があつたが頂上の風當りを恐れて、吹き溜りの所で裝食をとつた。凍つた餅は、仲々咽喉へ通らない。冬はパンに限るとつく〳〵思つた。
其處から大きく山腹を捲いて登る。ブルフアーの地帶は漸く過ぎて、針狀の結晶となる。前方はまるで判らないが、もう時間から見て、頂きは近いと思つた。
絶て、右手に針狀雪の大きな塊りがあつた。その裏に離つて調べた時に、それが刈田岳のお宮であると知つた喜び。

少し休んで、天氣を見る。山形の方も皆目見えない。強い霧である。風は相變らず吹き止まないが、雪は益り激しくないので堪へられないことはない。去年、先聖道が來た時と云ひ、この山ではこんな天氣が春過ぎ、晴れることは稀めて少いのだと思つた。氣を落付けて行けば、熊野岳まで行けると思つて、直ちに出發した。途中、所々に道標が針狀雪の衣を着けてゐるのがある。それを目標に少を進めた。降りにも氣を付けて、ゆつくり行く。能に前方に記念碑らしいものを認めたので、其處から引返した。降りにお宮をも發見したので其處が熊野岳の頂きであることは疑ひになつた。とすれば見失ひさうなシュプールを丹念につけて、刈田岳へと戻る。刈田岳からの降りには、右へ〳〵と行き過ぎるので、位程氣を付けないとシュプールを見失ふおそれがある。堅い、ぐと圧との雪面を滑く逸れて、深い、ブルフアーな二つのスキーは喜びの滑走を續ける。今は何の心殘りなく、放たれた矢のやうな心を乗せて。
ブルフアーを過ぎると、寒ノ硫のマーブルクラストだ。頑にしないエル・エス・ティも鮮かに滑り行く。雪面を降りた勢ひで向ふの雪面に乗挙げた時だ。キヤタストロフ！　クラストを破つて現れてゐる岩に、スキーの先きは跳ね折れた。直ちに用意の應急修理具で直す。所要時間、二十分。手が冷

図24　登高行第６年　新設小屋１



くて困つた。
再び、滑走を始めて間もなく愉快な一滑りは新設小舎へ。
そして暖々温泉へ。暗い温泉場の家の中に入ると直ぐに、赤い火の側で、雪の着いた頭巾を脱ぐか脱がぬに飲んだお汁粉の味は忘れられない。温泉の人が出て来て、山の話をしたり、自分達の今日の話を聞いたりする。
入日　曇後晴　昨日の滑走を忘れかねて、寝ノ嶽へ。今日は不歸嶽の左手を登つて行つた。相変らずの濃霧で、刈田岳も蔵王の山々も見えない。切れども、雪原のプロムナードは、又しても深い親しみを與へて呉れる。雪の山が秘めてゐる底深い親しさの、ほんの少しの現れでさへも、かくも幸福な思ひを與へて呉れるのかと思つた。然も、其處には常に厳然たるものゝあるのを忘れることは出来ないのだ。
帰りに、自分達は新設小舎に入つて休んだ。この小舎は、最近出来たもので、二間半に三間位、二階建の相當頑丈なものだ。唯、欠點としては窓が二重になつてゐないことだ。
罐に火を焚いた。窓外の夕闇は次第に濃くなつて行くが、自分達は容易に其處を立ち去らうとはしなかつた。語るよりも沈默が多かつた。
独て、凍つた窓ガラスに青白い月の光りが映り出した。罐の火を消して、再び戸を堅く閉じた。さらば行かん。月光を浴みて立つた次の立像は勝く。振り返へり見れば、星空の下、蔵王の山々は美しい銀光の波を反射して、その地上の潔白さを示してゐる。ハンス・モルゲンターレルをして「月明の夜々に」と叫びしめた知く、この月明の彷徨は、自分の生涯の何時にても清き思出となるであらう。
強いシュテムに温泉前の急坂を降り切つたのは、もう八時を過ぎて居た。
九日　晴　上ノ山へ乗鉄したい希望に燃えてゐたが、山の天候は依然として變なく、頂きの迷りは見へない。其他の事情もあるので、又の機會に譲つて今度は諦めることにした。再會を約して、温泉の人々に別れを告げる。倉敷を登り切つてから後は、蔵刈田まで唯一本の滑走路。林を抜けて、右に左にダーンしながら滑り行く。山形の空から、蔵王を眺てしきりと涙が飛ぶ。天平洋を眼下に、滑り行く自分達の心は、大きくのんびりしてゐる。そのタタ方、早川牧場へ寄つて、挨拶をして、汽車に乗る。
そして、汽車の窓から山を眺めた。

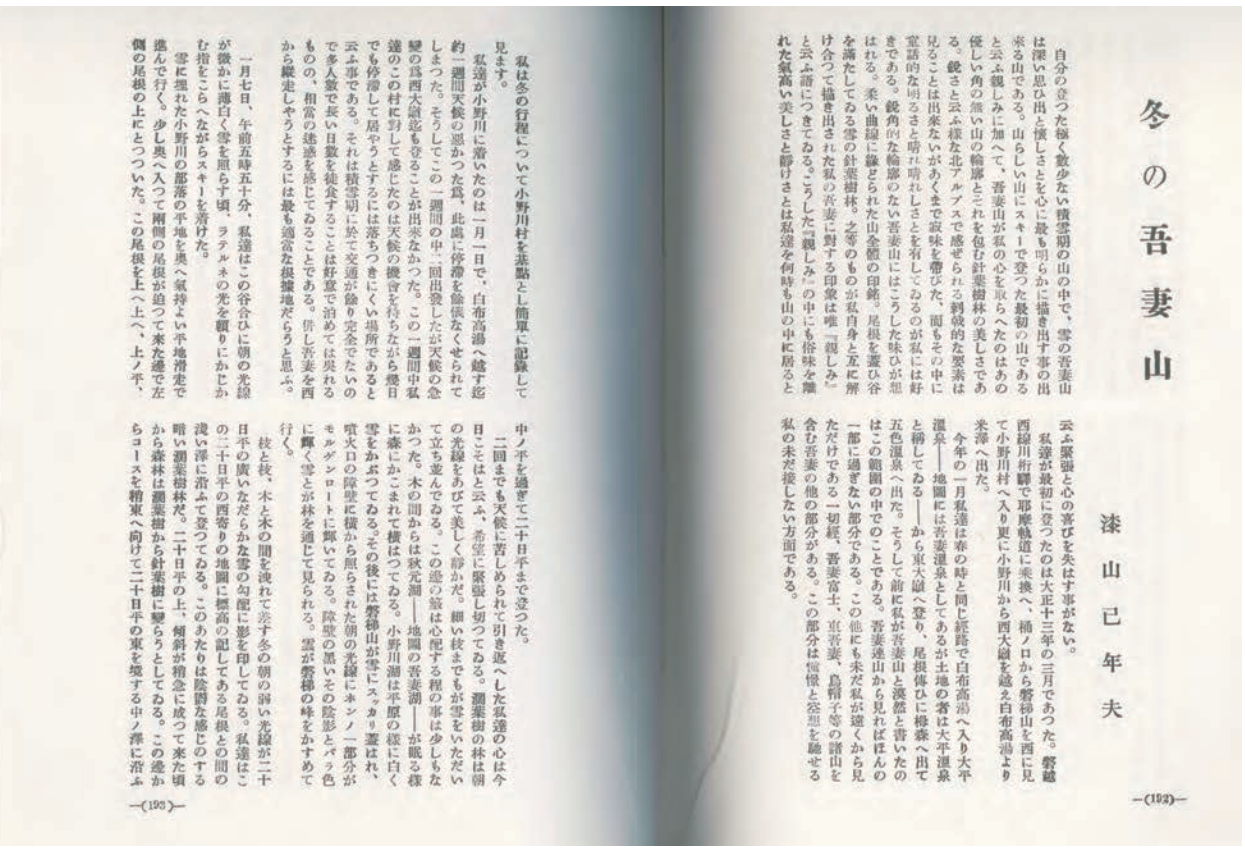
立山　劍岳スキー登山

三田幸夫　青木詩　早川雅三　佐藤久一郎　大賀清尚　本郷常孝

人夫　佐伯栄作　佐伯宗作　佐伯八郎　佐伯平蔵

一月一日　降雪　芦峰寺巻
二日　芦峰寺(八・一〇)—鹿摺(一〇・一〇—一・〇〇)—ブナ坂小屋(三・二〇)
雪おだやかに降る。ブナ坂屋の所に出来たヒュッテは、三間に二間のもので冬隊用のストーブ二個を備へてある。良い小屋である。温度、午後七時室内(+8°)
三日　ブナ坂小屋(一〇・一〇)—桑谷(一・二〇)—弘法小屋(四・三〇)
弘法茶屋のヒュッテのみても来る價値がある。ブルファーシュネーを浴びてスキーの練習。吹雪かれて四日間滞在する。樹氷が美しい。そして Moodhallmnichen.
四日　吹雪　滞在
五日　吹雪　滞在
六日　吹雪　滞在
七日　快晴　弘法小屋(九・二五)—退分(一〇・二五)—天狗平(一二・三〇)—室堂(一・三七—三・〇〇)—一ノ鎖(四・一五)—雄山(五・〇五—五・一五)—一ノ越(六・〇五)—室堂(六・一八)
室堂へ向ふ。雄先に柴ゆる麓師の頂きには雪煙り立つ。奥大日の純白の山稜。鍋石附近から室堂までは、ケイタドパウダーでラッセルするのも樂である。一ノ鎖をスキーデポットとする。雲飛つて、途のシュセックスが現れる。師で、月が上つて来る。一ノ鎖へ降りる時分にはすつかり暮れてしまつたが、月明りに室堂まで滑降する。八分のみ。青木、右足捻傷。
温度、天狗平(−8°)　室堂(−15°)　雄山神社此の風かけ(−15°)
午後八時室内(−8°)
八日　降雪夕方から晴れる。滞在　温度、午後八時半室内(−8°)
九日　晴後雪　室堂(六・二五)—別山乗鉄(九・一五)—鶴ケ御前下(一〇・〇〇)—御前小屋(一一・四五)—室堂(二・五五)
別山乗鉄附近はクルストが厳るかたい。室堂からよりは往復六時間を短縮することが出来る。鶴ケ御前の鞍部へ至る時分に、大陽に暈現れ、宗作は午後四時頃になると風が出て、それから先の予測はつかないと云ふ。そして六陽の暈が破れたり、大きくなるのは最も危險であると云ふ。室堂の小屋へ降る。大陽はぼんやりして来る。大賀、右足捻挫。静かに雪降る。温度、別山乗鉄(−11°)　室堂小屋(−8°)

図25　登高行第６年　新設小屋２



冬の吾妻山

漆山已年夫

自分の登つた極く数少ない積雪期の山の中で、雪の吾妻山は深い思ひ出と懐しさとを心に最も明らかに描き出す事の出来る山である。山らしい山にスキーで登つた最初の山であると云ふ親しみに加へて、吾妻山が私の心を取へたのはあの優しい角の無い山の輪廓とそれを包む針葉樹林の美しさである。鋭さと云ふ様な北アルプスで感ぜられる刺激的な要素は見ることは出来ないがあくまで親味を帯びた、面もその中に童話的な明るさと晴れ晴れしさとを有してゐるのが私には好きである。鋭角的な輪廓のない吾妻山にはこうした味ひが想はれる。柔い曲線に縁どられた山全體の印銘。尾根を蔽ひ谷を満たしてゐる雪の針葉樹林。之等のものが私自身と互に解け合つて描き出された私の吾妻に對する印象は唯「親しみ」と云ふ語につきてゐる。こうした『親しみ』の中にも俗味を離れた氣高い美しさと静けさとは私達を何時も山の中に居ると云ふ緊張と心の喜びを失はす事がない。
私達が最初に登つたのは大正十三年の三月であつた。磐越西線川桁驛で耶麻軌道に乗換へ、桶ノ口から磐梯山を西に見て小野川桁驛へ入り更に小野川から西大嶽を越え白布高湯より米澤へ出た。
今年の一月私達は春の時と同じ経路で白布高湯へ入り天平温泉——地圖には吾妻温泉としてあるが土地の者は天平温泉と稱してゐる——から東大嶽へ登り、尾根傳ひに梅森へ出て五色温泉へ出た。そうして前に私が吾妻山と漠然と書いたのはこの範圍の中でのことである。吾妻連山から見ればほんの一部に過ぎない部分である。この他にも未だ私が遠くから見ただけである一切経、吾妻富士、東吾妻、鳥帽子等の諸山を含む吾妻の他の部分がある。この部分は憧憬と空想を融せる私の未だ接しない方面である。

私は冬の行程について小野川村を基點とし簡単に記録して見ます。
私達が小野川に着いたのは一月一日で、白布高湯へ越す迄約一週間天候の悪かつた爲、此處に停滞を餘儀なくせられてしまつた。そうしてこの一週間の中二回出發したが天候の急變の爲西大嶽迄も登ることが出来なかつた。この一週間中私達のこの村に對して感じたのは天候の機會を待ちながら幾日でも停滞して居やうとするには落ちつきにくい場所であると云ふ事である。それは積雪期に於て交通が餘り完全でないので多人数で長い日數を徒食することは好意で泊めて呉れるものの、相當の迷惑を感じてゐることである。併し吾妻を西から縦走しやうとするには最も適當な根據地だらうと思ふ。
一月七日、午前五時五十分、私達はこの谷合ひに朝の光線が微かに薄白く雪を照らす頃、ラテルネの光を頼りにかじかむ指をこらへながらスキーを着けた。
雪に埋れた小野川の部落の平地を奥へ氣持よい平地滑走で進んで行く。少し奥へ入つて剛側の尾根が迫つて来た邊で左側の尾根の上にとつついた。この尾根を上へ上へ、上ノ平、中ノ平を過ぎて二十日平まで登つた。
二回までも天候に苦しめられて引き返へした私達の心は今日こそはと云ふ、希望に緊張し切つてゐる。潤葉樹の林は朝の光線をあびて美しく静かだ。細い枝までもが雪をいただいて立ち並んでゐる。この邊の旅は心配する程の事は少しもなかつた。木の間からは秋元湖——地圖の吾妻湖——が眠る様に森にかこまれて横はつてゐる。小野川湖は平原の様に白く雪をかぶつてゐる。その後には磐梯山が雪にスッカリ覆はれ、噴火口の障壁に横から照らされた朝の光線にネンノ一部分がモルゲンロートに輝いてゐる。障壁の黒いその陰影とパラ色に輝く雪とが林を通じて見られる。雲が磐梯の峰をかすめて行く。
枝と枝、木と木の間を洩れて差す冬の朝の弱い光線が二十日平の廣いなだらかな雪の勾配に影を印してゐる。私達はこの二十日平の西寄りの地圖に標高の記してある尾根との間の浅い澤に沿ふて登つてゐる。このあたりは除閑な感じのする暗い潤葉樹林だ。二十日平の上、傾斜が稍急に成つて来た頃から森林は潤葉樹から針葉樹に變らうとしてゐる。この邊からコースを稍東へ向けて二十日平の東を横切る中ノ澤に沿ふ

図26　登高行第６年　吾妻山手記１

様に心掛けた。今日は實に晴れ晴れした天氣に成つた。二十日乎の燈で西吾妻の頂上と西大嶽へ続くグラートが見えた。雪をかぶつた樹林は墨すんで見える。グラートは眞白だ。そうしてその白さが冬の空とは思はれない様な底知ぬ紺碧に浮き出てゐる。一六〇〇米あたりから、もうスッカリ針葉樹林に成り切つてしまつた。雪と氷に固められた針葉樹はギラ〳〵と日光に輝いて青空と調和してすばらしく美しい。そうしてこの真冬にも緑を失はず烈寒と強風に堪へて直ぐにのびて、蹂れた殉教者のけだかさを保つてゐる。

私達の心は益々緊張して来た。壯麗な樹氷に輝く針葉樹の間を縫つて西大嶽の下まで一氣に登つて来てしまつた。木はこの邊ではすつと低く成つて雪にスッカリ包まれて人形の様に成つてゐる。第一回の裳食を取る。温度は零點下八度を示してゐる。然し陽の照つてゐる爲か左程寒さが身にこたへない。

裳食を了へて一段の急傾斜を登ると三角點へ着く。狭い尾根の上へ出る。

十時半八分私達は三角點へ着いた。三角點の標が風に打ちつけられた雪をつけて眞白な雪の上に立つてゐる。穏全な事には今迄あんなによかつた天氣が、頂上へ出た時は雲で一面に蓋はれてしまつた。西吾妻も東大嶽へ続く尾根も全べては雲に消されて見えない。それに風も可成り出て来た。頂上の温度は零點下三度。相當な寒さが相當骨身にこたへる。

春の時は今私達の側に立つてゐる三角點の標は雪の下に隠れてゐた。そうして三角點から白布高湯へ降る夏道の尾根あたりまで、西吾妻の裾をからんで一氣に直滑降が出来たのが、冬のこの尾根は積雪量が非常に少ない。木が雪と氷に固まつて七、八尺位の高さで一面に立、並んでゐるので、その間を縫つて行くので滑走は全然出来ない。

夏道へ降る尾根の手前で雲の晴れるのを待つてゐた。然し遂に西吾妻は雲の中にその姿を隠して現はさない。天候もよく成りそうにも思はれなかつたので西吾妻を断念して降ることに極めた。

夏道のこの尾根は迂登つて来た西側より針葉樹が込み入つてゐて、春に比して雪の少ないのが殊更に苦しく感ぜられる。傾斜も可成りある。高湯側からの登攀は小野川側に比して時間は勿論アルバイトも遙かに要せらるるだらう。

十二時豈平へついた。上の方を見上げると今まで雲がかかつてゐた西吾妻が嶺巒たる其姿を青空に浮き出してゐる。もう少し待てばと云ふ未練が起つて来た。一時間程こゝで休んで高湯へ降つた。平から東に走つてゐる狭い尾根を心持ちよい直滑降を享樂しながらすんすん降つて行く。可成り降つてから右手の澤へ籔に苦しめられて下つた。

そうして高湯に着いたのは未だ三時頃であつた。其日の疲れた身體を心持よい温泉にひたした。

一月八日。この日は大した時間も要すまいと云ふ豫定で十時白布高湯を出發した。案内を二名こゝで雇つたが終始當てにならない案内振りで頭り甲斐ひのない男だつた。

道に沿ふて新高湯へ出て裏の急な傾斜をヂッグザッグで尾根の上に出る。背の高い白樺が象牙の腕を伸して勝ち誇る様に晴れた空にスックリと立つてゐる。優しい氣品のある西吾妻、西大嶽の姿は今日は青空に輝いてゐる。

この尾根を人形石の急坂の下まで登り其裾、蹤ミオド澤をからみクラスミ澤と今一つの小さな澤を越した頃から霧が濃くかかつてしまつた。霧の中にポンヤリと立つてゐる針葉樹のなだらかな傾斜を、氣持よくスキーで背もシャックも受け寸林間滑走を続けて行つた。全く愉快だつた。

コースは今地圖に夏道の記入してある尾根に出てこれを先端に向つて滑走を続けてゐる。その先端あたりについた時にはもうタ闇が次第に迫つてゐた。思はぬ時間を要してしまつた。この夕闇を通して見ると三方はとても下れそうにもない。再び戻つて夏道の横をヤット見出して澤を越す事が出來た。澤を渡つて一寸した斜面を登ると地圖に草地の記號のある原に出る。夜の幕はすつかり落されてしまつた。然し霧はもう綿籠に晴れて満月に近い月がこの原を一面に照してゐる。歳々に白樺が白い其肩に月光をあびて銀色に美しく見える。遠く下の方の平原の中心には米澤の灯がまたたいてゐる。

美しい！

静かだ！

私は唯心の中でこうつぶやいた。この月光のさゞ美しい原を見捨て私達は又暗い深い澤へ大平温泉をめがけて、クラストに成つてゐる急スロープを注意しながら降つた。八時近くに私達はヤット大平温泉に着いた。宿には番人が二人ゐるだけである。微い湯に其日の疲れを醫す。

大平温泉の三方は絶壁にかこまれてゐてスキーでは到底下ることは出來ない。白布高湯から来るには新高湯の裏の尾根

図27　登高行第６年　吾妻山手記２

を人形石まで登り尾根傳ひに夏道通りに大平温泉へ降るのが一番安全で時間も餘程経済になる。

一月九日。八時私達は愈々最後の一日の行程についた。豈間見るとよい道がついてゐる。道の通りに登つて昨夜の原に出た。今日は餘り落ち着いた天候ではない。原の端から道に離れてコースを左手に取つて丸森——一六九八米の三角點——の下に出た。三角點から出る二つの尾根にかこまれたカール状地の底に立つた。伐木をした跡らしく木の根が雪面に澤山でてゐていやな氣持のする場所だ。右手の尾根を大きなヂッグザッグを描きながら登つて尾根の上にでる。昨日登つて来た尾根が正面に見える。樹氷に包まれて美しく ゆつたりと裾を引いてゐる。段々に急に成つて行く尾根を丸森の頂上に向つて込み入つた針葉樹の間を次第に登つて行く。丸森の頂上からしばらくは緩やかに成つてゐるが針葉樹の密林に少し悩まされた。一段この密林の傾斜を登ると急に眼前に廣い彌兵衛平が霧に包まれて展開された。霧がひとゞこの廣大な平から東大嶽の頂上も樺森に鎧く山稜も到底見分け難いので、裳食をとつて霧の晴れるのを待つことにした。寒暖計は零點下七度乎まで下つてゐる。時間は未だ十二時を少し廻つた許りである。裳食を喰べてしまつたが未だ晴れない。地圖を頼りに登り氣味にコースを取りながら進んで行つた。其時私達の前面雲の上に高く眞白なピークが姿を現はした。東大嶽は地圖では彌兵衛平と殆んど同じ傾斜に記されてゐるのでこの雲の上のピークに一寸まごつかされてしまつた。幸ひにもこの時次第に霧も薄らぎ間もなく一面に眺望がきいて来た。そうして今のピークは東大嶽の頂上であることも直きに了解できた。私達はこの晴れ間にと急いで頂上へ登つた。一時三十分私達は廣い平らな東大嶽の頂上に立つ事が出来た。空はどんよりとして風は少しもなく、何んと無く不安な風の前の静さを思はせる無氣味な妙に落ち着いた天候であつた。然しこの不安な空氣の中にも私達の眼界はものすごい程明らかにズット遠くまで及んでゐる。東北には雪をいたゞいた蔵王の山塊が聳えてゐる。米澤の平原をへだてゝは朝日の連峰が夢の様に眞白く見える。月山もその側にそびえてゐる。東方には高倉、宝形、一切経の諸山が鳥帽子の半圓形の姿を前にその山波を見せてゐる。南方は未だよく晴れてゐないが唯人形石へ續く廣漠としたグラートが西方に延びてゐる。私達の今までの疲れも之の偉大さと静寂の前には一溜りもなく打ち消されてしまつた。寒暖計の水銀は零點下九度乎を示してゐた。

無氣味な天候なのでこの頂上にも僅か十五分で樺森に向つて最後の長い直滑降を開始した。

この山稜は丘陵状の凸凹が二三あつたが樺森まで一時間餘の間は全く心持ちよい直滑降に氣をうばはれた大して氣にもならなかつた。三時私達は樺森に着いた。針葉樹の木立のある雪地の雪面に腰を下ろして、残りの食料の全部を喰べながら一週間の小野川の停滞の忍従に報ひられた愉快とこの三日の楽しかつた山の中の思ひ出を一つ一つ心の中に、頑張る菓子と共に噛み聚めて私達は互に幸福に微笑えんだ。樺森から五色から望んで行きたいと思つてゐた長いスロープを一氣に峠の驛まで降つてしまつた。

汽車で板谷へ、そして直ちに五色温泉迄其日の中に行つてしまつた。

五色に来てゐた友人と山の話に夜を更かしながらも私達の楽しい愉快だつた思ひ出は吾妻の針葉樹の間に融せてゐる。

附　記

今度吾妻に行つたパーティのものが、感じた點及前年の巻と比較して氣のついた事をこゝに附記として認めました。

此の行の中で痛切に感じた事は根據地と云ふ事でした。私達が根據地として、小野川村は西大嶽に登るには地形から云つて雪の狀態から云つて最適の地であると思はれます。此の小野川村は十數戸の部落に過ぎず、勢様山麓火後に出来た小村で從つて農を主とする事が出來ず、輪を作るを以て生活の唯一の方法として居る村です。宿屋は勿論なく好宿に依つて餘り宿縁でない農家に泊めてもらわけです。農作物の出来ない所故後等は米を買つて食つて居ます。其の上冬に入つて交通神絶の狀態ですから、彼等には思ひがけない客を泊める事は非常な苦痛なのです。山の中ですから燃料は豐富かと思へば、小林區事務所が出來てからは勝手に樹木を切る事が出來ない様になつたこと居て居ました。山に入るものに樹木を節約しなければならない事は苦痛です。度々頂近く迄行つては天候の急に崩れて約一週間を農家の厄介になりました。帰つて来る度に濟まないといふ氣で一ぱいで有りながら、どうしても計畫を遂行しやうといふ考への爲に宿を乞はなければなりませんでした。冬は夏と違つて少しの機會を掴む爲に多くの日數を要します。其の爲にはどうしても思ふ存分滞在して機會をねらはねばなりません。若し此の村に小屋か宿屋かがあれば度々思ひました。それは宿屋なら金の有る限り義理から離れて、滞在出來ると思

図28　登高行第６年　吾妻山手記３

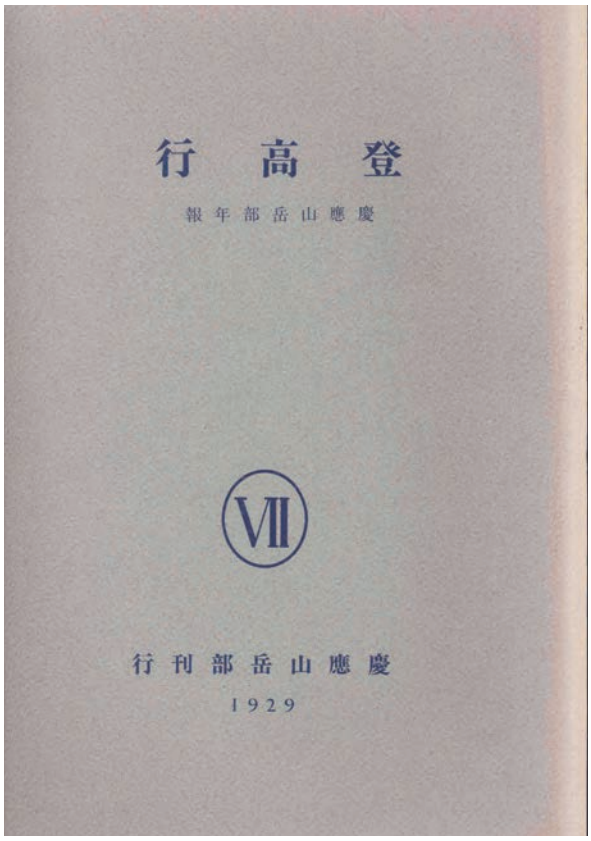


図29　登高行第７年　表紙

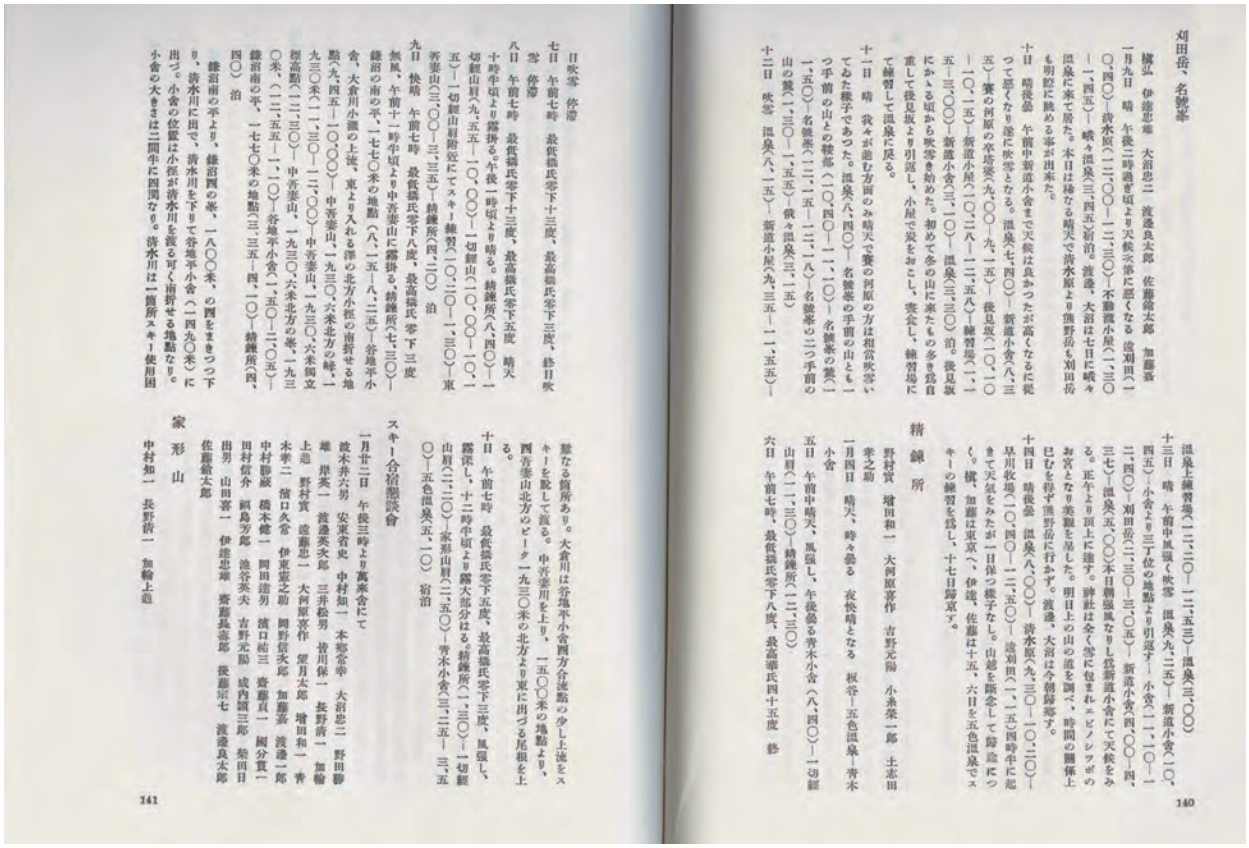


図30　登高行第７年　エビノシッポ

登つて行く路ばたの笹は頭上につた雪をはねのけて突つ立ち上つた。もう春が近づいたのだ。一冬の間雪の下に埋められて忍従して居た笹は春の日の惠みを受けて活氣づき男々しくも雪をはらひのけて殿かに立つたのだ。その葉は未だゆれ止まず葉の面には雪がとけて朝日に光つて居る。男々しい樣である。數時間の後峯々温泉と登山路との分岐點に來た。天氣は何んとも解らないが、此の調子で明日天氣なら皆で行くから今日はコースを見に一部分の者が行けばいゝと相談が定まつた。青木、佐藤、大賀、田中、本郷、西川の六名はコースを見に行く事になつて他は一足先に温泉に下つて行つた。

朝の心配した雲はすつかり晴れ渡つて新道小屋に來た時には昨日の吹雪に引きかへ、靄らかな太陽が靜かに賽ノ磧の雪の上に照つて居た。新道小屋からは廣い雪の斜面を左にコースを取りつゝ卒塔婆迄來た。其處ら一面理想的なマーブルクラストになつて居た。賽ノ磧だけあつて風の強い勢が信者の積み重ねた石の上には雪も被つて居なかつた。彼方には刈田嶽、熊野嶽の一面が眞白にその姿を横へて居る。左の方には杉ケ峯、屏風嶽の男々しい姿が見られる。夕日に光つた壯嚴な白妙の姿に見とれて居ると、不歸淵の鞍部を唯一騎雪煙を上げて下つて來る。此んな天氣ゥ良くもつかんで登つた彼の人は幸福な人だと羨んだ。後で聞けば東北大學の額田君だつた。邊りの景色をあかず眺めて六人は下り始めた。それ程の傾斜でもないのに飛ぶ樣に辷つて行く。各々右に左にエル・エス・テッをやりながら愉快に下つて行く。よくもこんなに連續的に出來るものだと思はせられる位身分不相應な滑走をする。ほんの一息で新道小屋についた。夕方の景色を惜みつゝ蔵小屋の雪の上に小憩の後下つて行く。唯兩枝でつきさへすれば辷つて行く。理想的な粉雪である。またたく間に温泉に下つた。夜は快晴で一點の雲もなく屋が銳くまたゝいて居る。俗所からのぞけば星明りに家の蔭があはく雪の上に落ちて居る。一同男み立つて準備を整へて食料を分配した。今日登つた額田

君に樣子を聞いた。昨年より雪が少く、御釜には三日月形の氷がはつて居るし、山形方面はこちらに比して山麓迄雪が多いとの事であつた。明日の晴天を期待しつゝ九時就寝した。

十　日

天氣が心配で起きて見れば、豈測らんや昨夜の星は姿も見せず、雨戸をくつて出したランプの燈火に照らされた一部分の空間を雪は靜々として降りついで居るのが見える、其の上風さへ加はつて凄いうなり聲を立てゝ居る。がつかりしてやはに又元の寝床にもぐり込んで終ふ。外を見て來たものが吹雪だといへば寝ながら氣をもんで居たものも落ちついて又眠り出すといふ始末だ。まつたく天候の豫測がつかないので一日滯在する事になつた。腹癒せにすき透つた廣い湯槽につかりながら歌などとなる。温泉のおばさんは岡東の人と見えてはき〳〵した東京辯で汁粉を作つて與れたり御馳走で一生懸命である。甘い樣な言葉ですぐに『何もおいしいものがなくて』とさも濟まない樣にお世辭を云つて居る。時々天氣をのぞきに出るが失望して歸へつて來る。閉燈程をかこんで話するものもあれば、ごろごろと轉つて空想に耽けるらしいものもある。

温泉には家の人々が浸かりながら歌を歌つて居る。湯氣が濛々として顔も姿も見えない。歌ばかりが聞えて來る。何所へ云つても歌のない所はない。この邊の樣な所で殊に冬なんかは湯に浸つて歌でも歌はなければ淋しさに耐へられないだらう。何んとなく湯につかつて靜かに歌ふ歌が、歌ふその人の心も身體をも慰め休める樣な氣がする。

一同相談の上峯々温泉に於て持久策を取る事となつた。夜になると雲は何所かへ散つて終つて星が輝き出す。然し誠ももう明日は大丈夫天氣だと受け合ふ者もなくなる。人がいくら何んといつても自由に出來ないものは天候である。

十　一　日

図31　登高行第７年　新道小屋

廿七日　午前中晴、午後霧　温泉（七、四〇）名剣峯頂上（一一、〇五―一一、五〇）熊野岳頂より百米下の所（一、〇〇〇）霧深きため引返す　温泉（三、四五）宿泊

廿八日　晴　温泉（八、一五）―新道小屋（九、一五）―卒塔婆（九、四五）―（九、四五）五本突の獨立標高點を廻らずに杉ケ峯へ登らうと思ひ其下の方へ降りて見たが谷が深くて通れず、十一時五〇分引返す―新道小屋の上の斜面にて練習（二、〇〇―三、〇〇）―温泉（三、三〇）宿泊

廿九日　暴風強し　額田氏の依頼を受け遭難者捜索に従事。

卅日　晴　解散

一方山、湯ノ丸山、四阿山

大島英吉

昭和元年十二月廿六日　晴　荻野驛―新張―六十番小屋　泊

廿七日　晴　湯ノ丸山

廿八日　晴　三方山

廿九日　晴　六十番小屋（七、三〇）―鹿澤温泉―古水井―鳥居峠―

温澤（四、〇〇）　宿泊

卅日　晴　温澤（八、〇〇）―四阿山（一二、〇〇―一、三〇）―温澤（四、〇〇）　宿泊

卅一日　晴　温澤―上田―歸京

附記　此行は寒袋の効果試驗を目的とせり。結果良し。晴天嶽きにて都合良かりしも不幸靴傷とスキー破損の爲の行程中途にて歸京せるは殘念なり。單獨にてスキー登山する際は當然助かる可きを傷、スキーの破損等により他の場合に於ては當然助かる可きを助からぬことあり。登山中例へば足を捻折せし場合友人と共にあらば助かる可し。單獨の際には若し他に登山者無き際は甚だしく危險の狀態に陥るを注意すべし。人家に遂ければ終ひに生命を失ふこともある可し。

蔵王越え上ノ山へ

國分貫一　守屋時郎

一月一日　上野發

二日　晴後曇　大河原驛―遠刈田―峨々温泉　宿泊

三日　快晴　峨々温泉（七、四八）―新道小舎（八、四八）　賽の河原（九、一五）―刈田岳（一一、〇〇―一二、〇〇）―清水小舎（一、三〇―二、三〇）―仙人澤を渡る（三、三〇）―上ノ山町（五、五五）　汽車にて―五色温泉（一一、三〇）　宿泊

附記　天氣が非常に良かつた事は何よりの幸福だつた。刈田岳から下は地形の廣いところであるが、地圖が良く出來てゐたので一度も間違はずに清水小舎迄下れた。天氣の惡い時は此の道を下らない方が良い。蔵は強りない、雪も賽の河原の樣な風の影響をうけず、粉雪のところが多く非常に愉快な滑走が出來た。清水の小舎は雪面に出てゐた。水はその小舎のすぐ前に出てゐた。地圖で見ると三本檜（地圖の遠倉森山の東の所にある針葉樹の印のところ）から北西に行く道は草原の中を通る樣になつてゐるが今は松を植林してしまつてゐて、兩白く滑れなかつた。裂熊が入つてゐた。仙人澤の出口から上ノ山迄もずつと雪があつたのカチカチなのでスキーを脱いで歩いた。

五色温泉スキー練習

槻弘　濱口久雄　濱口定之助

一月二日　晴風強し　板谷驛（八、三〇）―鉢森頂上（一一、〇〇）―五色温泉（一二、三〇）　一日夜野田愛の際寒子木先生と槻弘君の一行と一所になつた。先生法は板谷驛からすぐに温泉の方に行かれ僕達二人が鉢森へ出かけた。此の冬は雪が非常に少なく藍がかなり出てゐた爲に歸途の愉快な滑走は不可能だつた。

三日　快晴　温泉（八、三〇）―高倉山頂上（一一、三〇―一二、三〇）―清六（二、〇〇―三、〇〇）―温泉（四、三〇）　此日は風殆んどなく實に冬季にめづらしい快晴であつた。高倉山頂上より西南方に家形から東大綱に連なる純白な峯々、又西北方蔵かに大朝日岳のくつきりと無限の蒼空を劃して誇らしげに聳へ立つ雄大な山容を目のあたり望む事が出來た。歸途雪が融け滑走不快。兎に角此の冬は温度は比較的暖く且つ降雪が僅少であつた爲スキー練習には不適當であつた。此夜蔵王方面へ發つた國分、守屋の兩君が温泉へ來てかなり賑かになつた。夜中添山君も東京から來た。

四日　曇午後雨となる。此日は先生と槻弘君も一所に再び高倉山へ出掛けた。歸りに尾根を滑つたのは相當愉快だつた。下へ來ると雨が降つて來たので直ぐ温泉へ歸つた。此夜先生から創立當時の山岳會の麗はしい且つ壯嚴した氣持及び僕等の今後爲すべき事柄に付いて種々御教訓を承はり、僕等はその夜興奮して床に就いた。

五日　暴風強し　十時頃温泉を下つて鉢森の途中まで行き、その附近で遊んで三時半頃温泉に歸つた。此夜も先生から山岳精神の事に付いて色々お話をうかがつた。

六日　曇後雨　此日先生は槻弘君と午前中の汽車で歸京せられた。午後練習に出たが雨が降つて來たから直ぐ止めてしまつた。

七日　曇　後雨(夕方)、桐山の兩君が來た。数日來降雪全く無き爲練習場は氷の如く堅くなり練習は全く不愉快だつた。その夜歸京。

四　阿　山

西川不二雄　野村貫　土屋勇　伊達忠雄　堀内俊夫　藤江才介

鷲治也(横須賀市)

一月三日　上野

四日　田中―地蔵峠―鹿澤温泉

五日　快晴　三方に登る。

六日　晴　温泉（八、五〇）―龍ノ登頂上（一一、四〇―一、〇五）―三方頂上（二、一〇）―南斜面で練習をなし四、四〇温泉着。本日午後

図32　登高行第７年　蔵王越え上ノ山へ

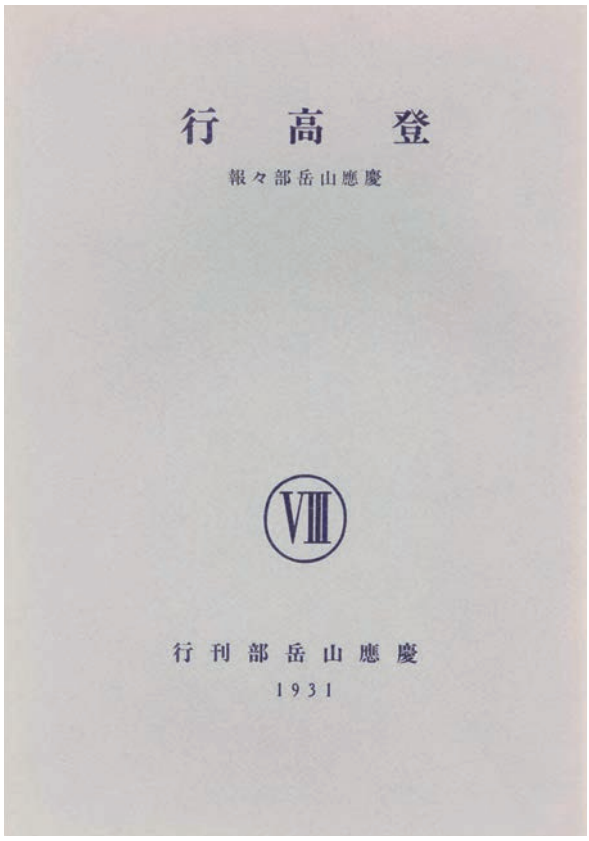


図33　登高行第８年　表紙

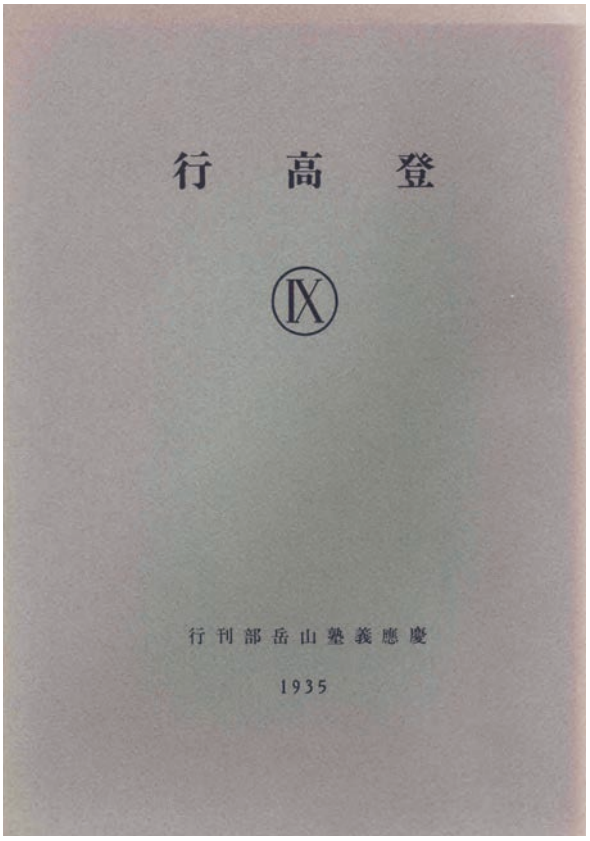


図34　登高行第９年　表紙

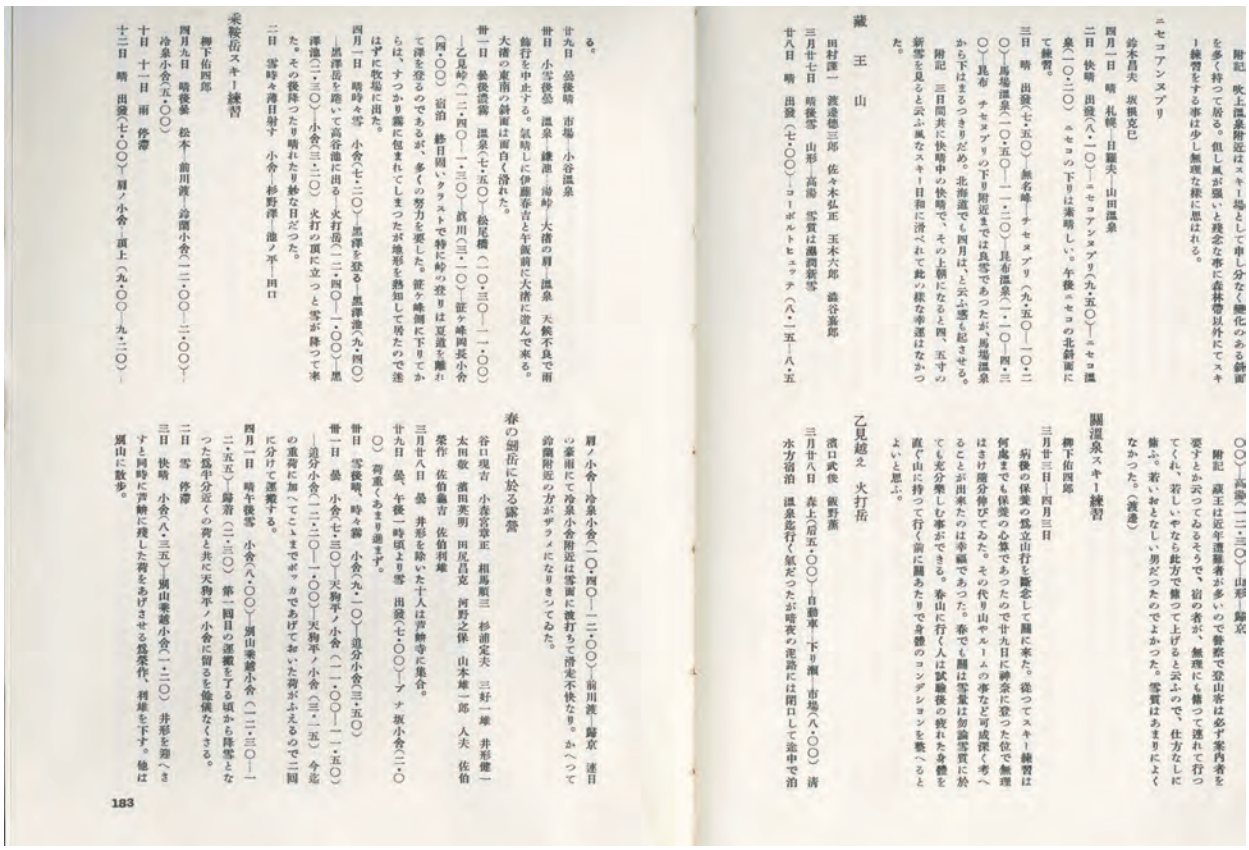


図35　登高行第９年　コーボルト滞在

図36　登高行第10年　表紙

図37　登高行第11年　表紙

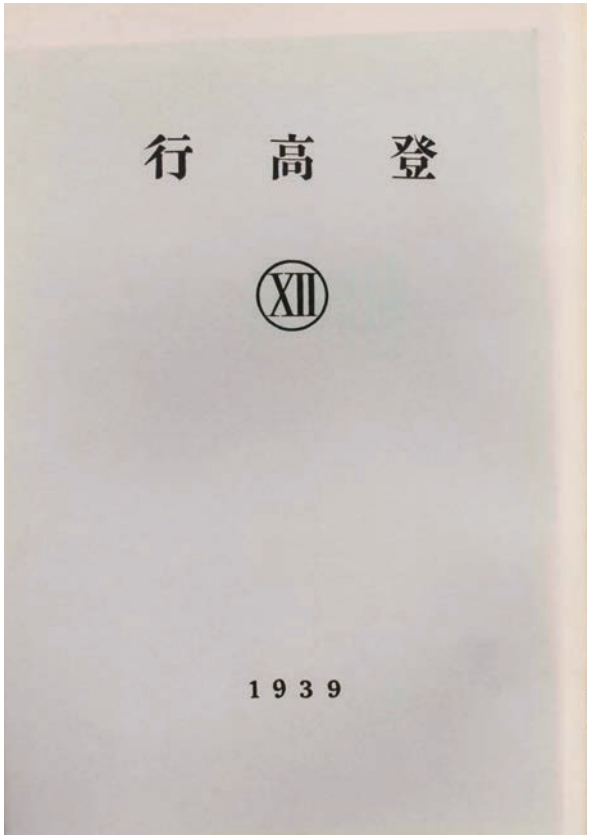


図38　登高行第12年　表紙

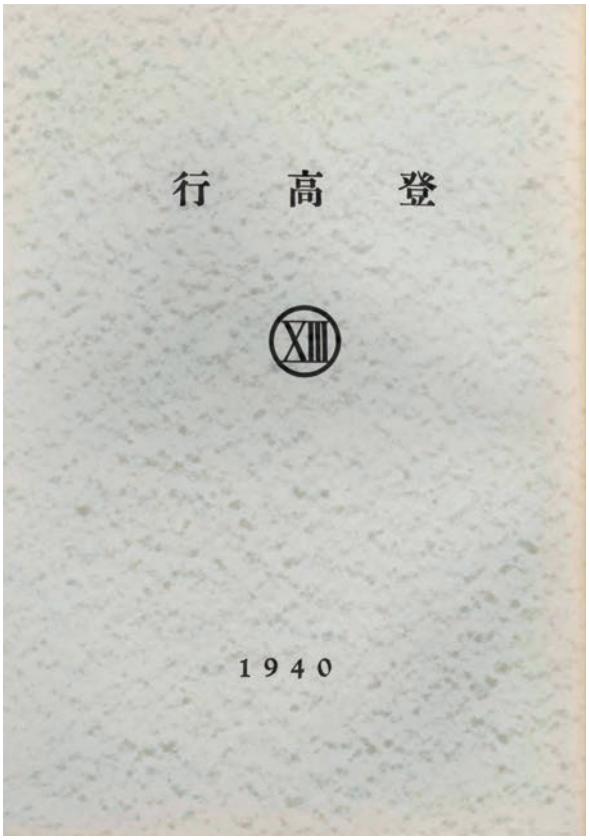


図39　登高行第13年　表紙

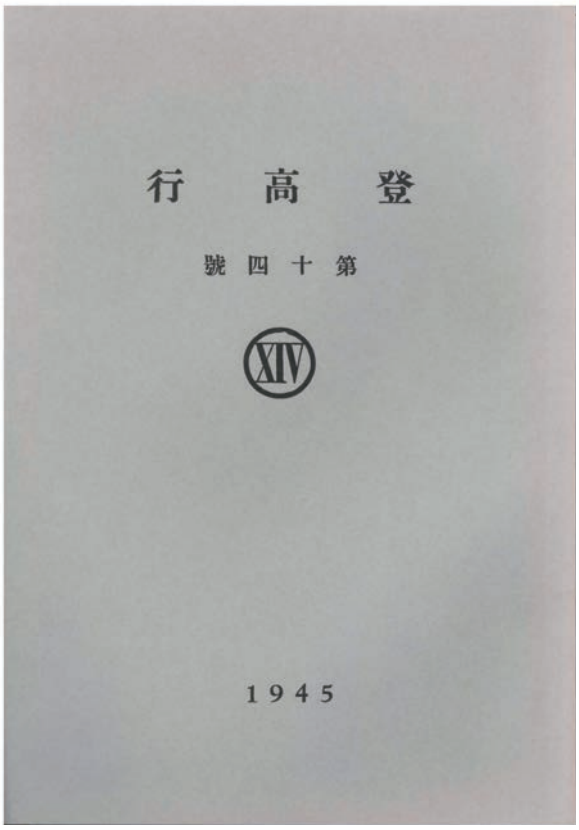


図40　登高行第14年　表紙

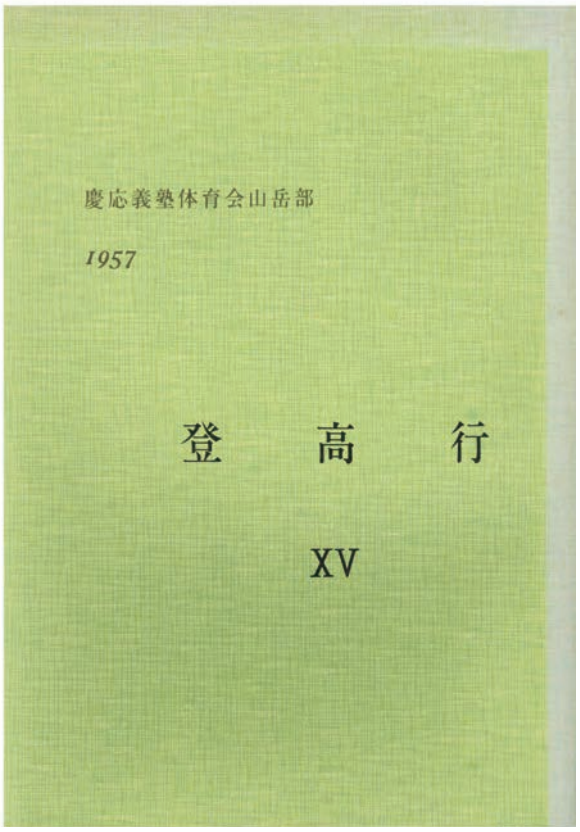
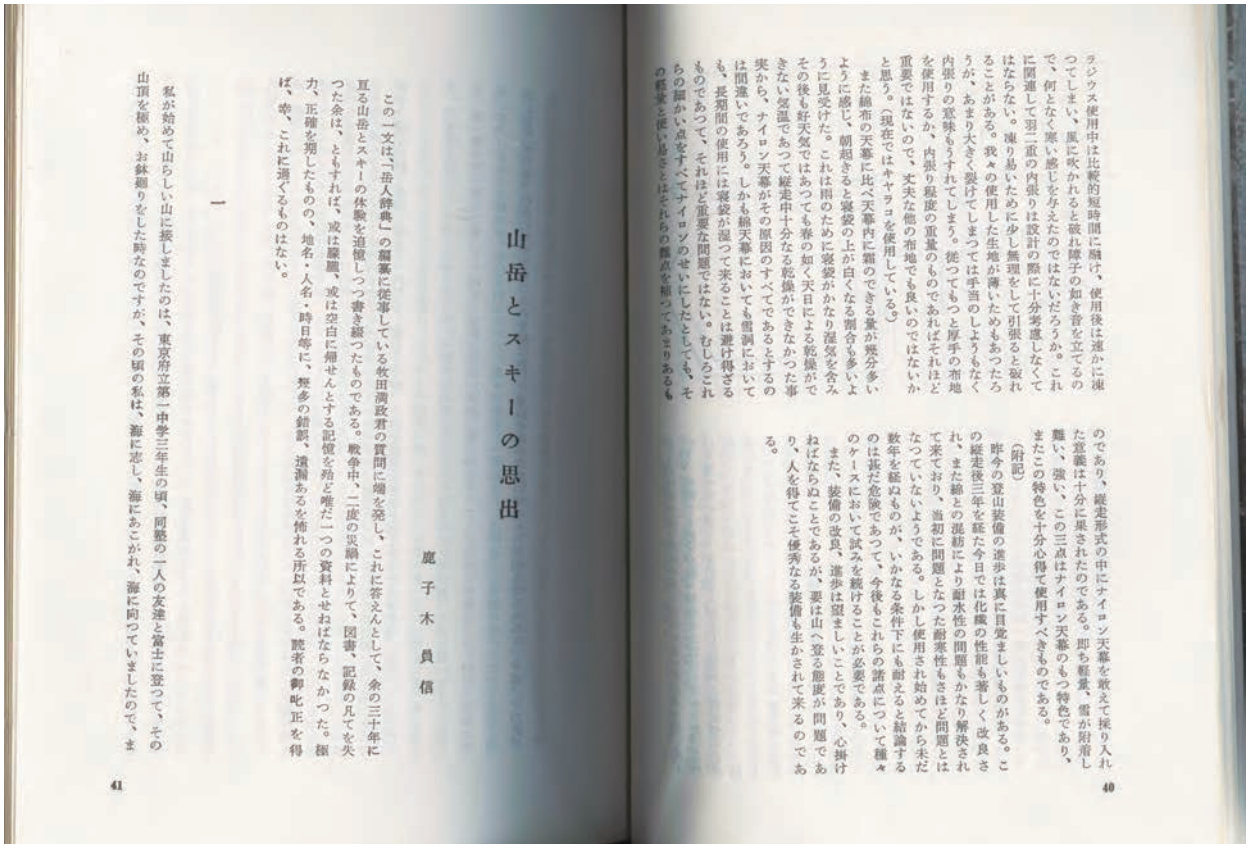


図41　登高行第15年　表紙



山岳とスキーの思出

鹿子木員信

この一文は、「岳人辞典」の編纂に従事している牧田潤政君の質問に端を発し、これに答えんとして、余の三十年に亘る山岳とスキーの体験を追憶しつつ書き綴つたものである。戦争中、二度の災禍により、図書、記録の凡てを失つた余は、ともすれば、或は朦朧、或は空白に帰せんとする記憶を殆ど唯だ一つの資料とせねばならなかつた。極力、正確を期したものの、地名・人名・時日等に、無多の錯誤、遺漏あるを怖れる所以である。読者の御叱正を得ば、幸、これに過ぐるものはない。

一

私が始めて山らしい山に接しましたのは、東京府立第一中学三年生の頃、同塾の一人の友達と富士に登つて、その山頂を極め、お鉢廻りをした時なのですが、その頃の私は、海に恋し、海にあこがれ、海に向つていましたので、ま

41

ラジウス使用中は比較的短時間に融け、使用後は速かに凍つてしまい、風に吹かれると破れ障子の如き音を立てるので、何となく寒い感じを与えたのではないだろうか。これに関連して羽二重の内張りは設計の際に十分考慮しなくてはならない。凍り易いために少し無理をして引張ると破れることがある。我々の使用した生地が薄いためもあつたろうが、あまり大きく裂けてしまつては手当のしようもなく内張りの意味もうすれてしまう。従つてもつと厚手の布地を使用するか、内張り程度の重量のものであればそれほど重要ではないので、丈夫な他の布地でも良いのではないかと思う。（現在ではキャラコを使用している。）

また綿布の天幕に比べ天幕内に霜のできる量が幾分多いように感じ、朝起きると寝袋の上が白くなる割合も多いように見受けた。これは用のために寝袋がかなり湿気を含みその後も好天気ではあつても春の如く天日による乾燥ができない気温であつて疑走中十分なる乾燥ができなかつた事実から、ナイロン天幕がその原因のすべてであるとするのは間違いであろう。しかも綿天幕においても雪洞において も、長期間の使用には寝袋が湿つて来ることは避け得ざるものであつて、それほど重要な問題ではない。むしろこれらの細かい点をすべてナイロンのせいにしたとしても、その軽量と使い易さとはそれらの難点を相つてあまりあるものであり、縦走形式の中にナイロン天幕を敢えて採り入れた意義は十分に果されたのである。即ち軽量、雪が附着し難い、強い、この三点はナイロン天幕のもつ特色であり、またこの特色を十分心得て使用すべきものである。

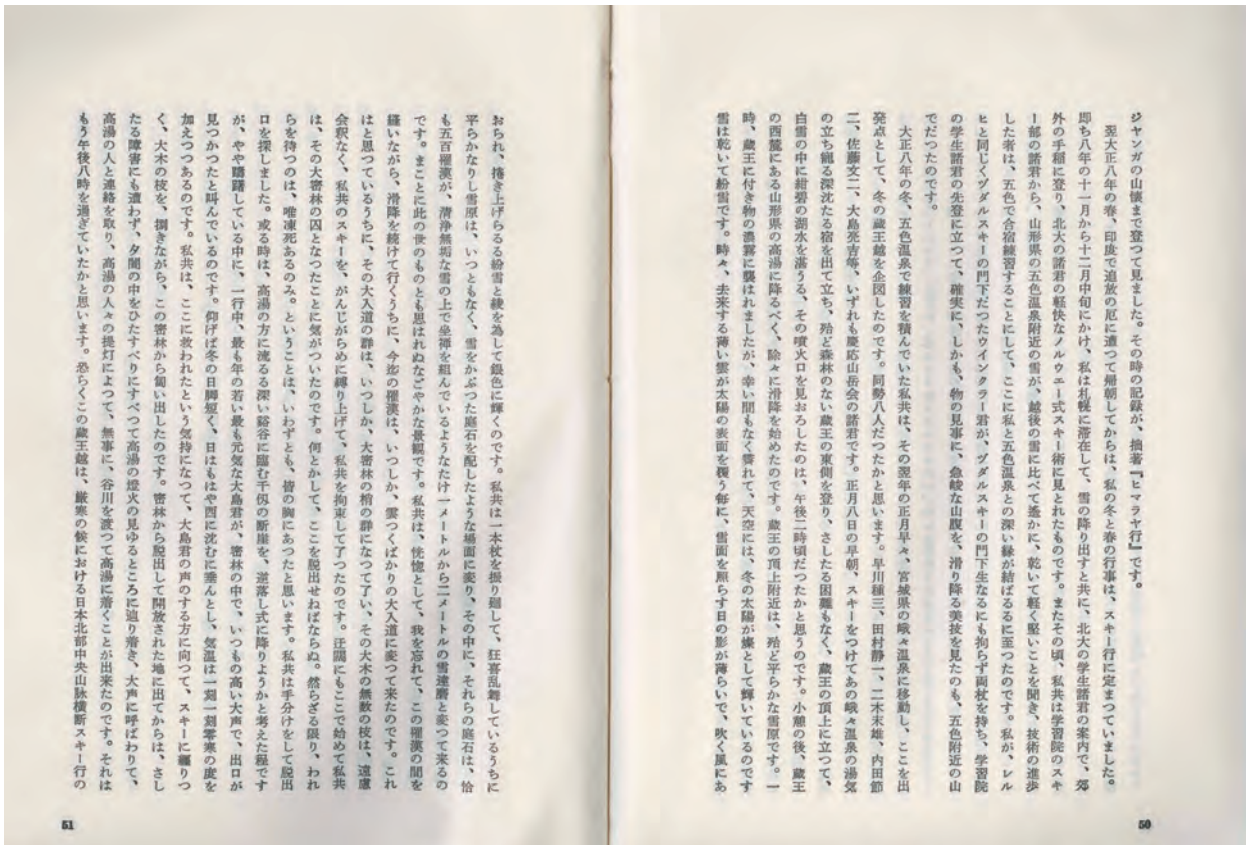
（附記）

昨今の登山装備の進歩は真に目覚ましいものがある。この縦走後三年を経た今日では化繊の性能も著しく改良され、また綿との混紡により耐水性の問題もかなり解決されて来ており、当初に問題となつた耐寒性もさほど問題とはなつていないようである。しかし使用され始めてから未だ数年を経ぬものが、いかなる条件下にも耐えると結論するのは甚だ危険であつて、今後もこれらの諸点について種々のケースにおいて試みを続けることが必要である。

また、装備の改良、進歩は望ましいことであり、心掛けねばならぬことであるが、要は山へ登る態度が問題であり、人を得てこそ優秀なる装備も生かされて来るのである。

40

図42　登高行第15年　回想録１



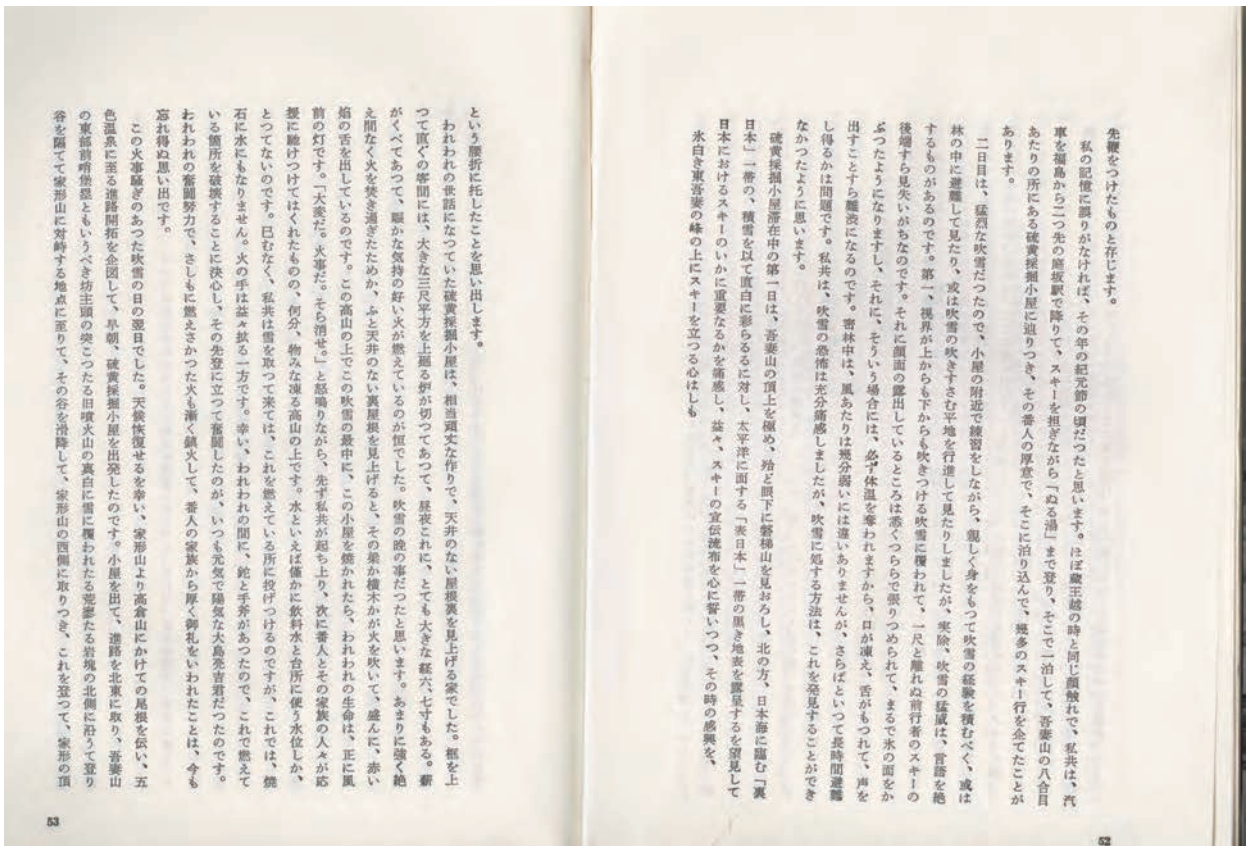
ジヤンガの山懐まで登つて見ました。その時の記録が、拙著『ヒマラヤ行』です。

亞大正八年の春、印度で追放の厄に遭つて帰朝してからは、私の冬と春の行事は、スキー行に定まつていました。即ち八年の十一月から十二月中旬にかけ、私は札幌に滞在して、雪の降り出すと共に、北大の学生諸君の案内で、郊外の手稲に登り、北大の諸君の軽快なノルウェー式スキー術に見とれたものです。またその頃、私共は学習院のスキー部の諸君から、山形県の五色温泉附近の雪が、越後の雪に比べて遙かに、乾いて軽く堅いことを聞き、技術の進歩した者は、五色で合宿練習することにして、ここに私と五色温泉との深い縁が結ばるるに至つたのです。私が、レルヒと同じくヅダルスキーの門下だつたウインクラー君が、ヅダルスキーの門下生なるにも拘らず両杖を持ち、学習院の学生諸君の先登に立つて、確実に、しかも、物の見事に、急峻な山腹を、滑り降る美技を見たのも、五色附近の山でだつたのです。

大正八年の冬、五色温泉で練習を積んでいた私共は、その翌年の正月早々、宮城県の蔵王越を企図したのです。同勢八人だつたかと思います。早川種三、田村静一、二木末雄、内田節二、佐藤文二、大島発吉等、いずれも慶応山岳会の諸君です。正月八日の早朝、スキーをつけてあの峨々温泉の湯気の立ち籠る深沈たる宿を出て立ち、殆ど森林のない蔵王の東側を登り、さしたる困難もなく、蔵王の頂上に立つて、白雪の中に紺碧の湖水を瞰うる、その噴火口を見おろしたのは、午後二時頃だつたかと思うのです。小憩の後、蔵王の西麓にある山形県の高湯に降るべく、除々に滑降を始めたのです。蔵王の頂上附近は、殆ど平らかな雪原です。一時、蔵王に付き物の濃霧に閉ぢはれましたが、幸い間もなく霽れて、天空には、冬の太陽が燦として輝いているのです雪は乾いて粉雪です。時々、去来する薄い雲が太陽の表面を覆う毎に、雪面を照らす日の影が薄らいで、吹く風にあ

おられ、捲き上げらるる粉雪と練を為して銀色に輝くのです。私共は一本杖を振り廻して、狂喜乱舞しているうちに平らかなりし雪原は、いつともなく、雪をかぶつた庶石を配したような場面に変り、その中に、それらの庶石は、恰も五百羅漢が、清浄無垢な雪の上で坐禅を組んでいるようなたけ一メートルから二メートルの雪達磨と変つて来るのです。まことに此の世のものとも思はれぬなどやかな景観です。私共は、恍惚として、我を忘れて、この羅漢の間を縫いながら、滑降を続けて行くうちに、今迄の羅漢は、いつしか、雲つくばかりの大入道に変つて来たのです。これは、と思つているうちに、その大入道の群は、いつしか、大密林の梢の群になつて了い、その大木の無数の枝は、遠慮会釈なく、私共のスキーを、がんじがらめに縛り上げて。私共を拘束して了つたのです。迂闊にもここで始めて私共は、その大密林の囚となつたことに気がついたのです。何とかして、ここを脱出せねばならぬ。然らざる限り、われらを待つのは、唯凍死あるのみ。ということは、いわずとも、皆の胸にあつたと思います。私共は手分けをして脱出口を探しました。或る時は、高湯の方に流るる深い谷谷に臨む千仞の断崖を、逆落し式に降りようかと考えた程ですが、やや躊躇している中に、一行中、最も年の若い最も元気な大島君が、密林の中で、いつもの高い大声で、出口が見つかつたと叫んでいるのです。仰げば冬の日脚短く、日はもはや西に沈むに垂んとし、気温は一刻一刻零寒の度を加えつつあるのです。私共は、ここに救われたという気持になつて、大島君の声のする方に向つて、スキーに纏りつく、大木の枝を、掴きながら、この密林から匍い出したのです。密林から脱出して開放された地に出てからは、さしたる障害にも遭わず、夕闇の中をひたすべりにすべつて高湯の燈火の見ゆるところに辿り着き、大声に呼ばわりて、高湯の人と連絡を取り、高湯の人々の提灯によつて、無事に、谷川を渡つて高湯に着くことが出来たのです。それはもう午後八時を過ぎていたかと思います。恐らくこの蔵王越は、厳寒の候における日本北部中央山脈横断スキー行の

図43　登高行第15年　回想録2



先覆をつけたものと存じます。

私の記憶に誤りがなければ、その年の紀元節の頃だつたと思います。はぼ蔵王越の時と同じ顔触れで、私共は、汽車を福島から二つ先の庶板駅で降りて、スキーを担ぎながら「ぬる湯」まで登り、そこで一泊して、吾妻山の八合目あたりの所にある硫黄採掘小屋に辿りつき、その番人の厚意で、そこに泊り込んで、幾多のスキー行を企てたことがあります。

二日目は、猛烈な吹雪だつたので、小屋の附近で練習をしながら、親しく身をもつて吹雪の経験を積むべく、或は林の中に避難して見たり、或は吹雪の吹きすさむ平地を行進して見たりしましたが、寒険、吹雪の猛威は、言語を絶するものがあるのです。第一、視界が上からも下からも吹きつける吹雪に覆われて、一尺と離れぬ前行者のスキーの後端すら見失いがちなのです。それに顔面の露出しているところは悉くつちらで張りつめられて、まるで氷の面をかぶつたようになりますし、それに、そういう場合には、必ず体温を奪われますから、口が凍え、舌がもつれて、声を出すことすら難渋になるのです。密林中は、風あたりは幾分弱いには違いありませんが、さらばといつて長時間避難し得るかは問題です。私共は、吹雪の恐怖は充分痛感しましたが、吹雪に処する方法は、これを発見することができなかつたように思います。

硫黄採掘小屋滞在中の第一日は、吾妻山の頂上を極め、殆と眼下に磐梯山を見おろし、北の方、日本海に臨む「裏日本」一帯の、積雪を以て直白に彩らるるに対し、太平洋に面する「表日本」一帯の黒き地表を露呈するを望見して日本におけるスキーのいかに重要なるかを痛感し、益々、スキーの宣伝流布を心に誓いつつ、その時の感興を、氷白き東吾妻の峰の上にスキーを立つる心はしも

という腰折に托したことを思い出します。

われわれの世話になつていた硫黄採掘小屋は、相当頑丈な作りで、天井のない屋根裏を見上げる家でした。柩を上つて直ぐの客間には、大きな三尺平方を上廻る炉が切つてあつて、昼夜これに、とても大きな薪六、七すもある。薪がくべてあつて、賑かな気持の好い火が燃えているのが恒でした。吹雪の晩の事だつたと思います。あまりに強く絶え間なく火を焚き過ぎたためか、ふと天井のない裏屋根を見上げると、その梁か横木が火を吹いて、盛んに、赤い焔の舌を出しているのです。この高山の上でこの吹雪の最中に、この小屋を焼かれたら、われわれの生命は、正に風前の灯です。「大変だ。火事だ。そら消せ。」と怒鳴りながら、先ず私共が起ち上り、次に番人とその家族の人々が応援に馳付けてはくれたものの、何分、物みな凍る高山の上です。水といえば僅かに飲料水と台所に使う水位しか、とつてないのです。已むなく、私共は雪を取つて来ては、これを燃えている所に投げつけるのですが、これでは、焼石に水にもなりません。火の手は益々拡る一方です。幸い、われわれの間に、鉈と手斧があつたので、これで燃えている箇所を破壊することに決心し、その先登に立つて奮闘したのが、いつも元気で陽気な大島発吉君だつたのです。われわれの奮闘努力で、さしもに燃えさかつた火も漸く鎮火して、番人の家族から厚く御礼をいわれたことは、今も忘れ得ぬ思い出です。

この火事騒ぎのあつた吹雪の日の翌日でした。天候恢復せるを幸い、家形山より高倉山にかけての尾根を伝い、五色温泉に至る進路開拓を企図して、早朝、硫黄採掘小屋を出発したのです。小屋を出て、進路を北東に取り、吾妻山の東部翁峰熊瑟ともいうべき坊主頭の突こつたる旧噴火山の真白に雪に覆われたる荒廃たる岩塊の北側に沿うて登り谷を隔てて家形山に対峙する地点に至りて、その谷を滑降して、家形山の西側に取りつき、これを登つて、家形の頂

図44　登高行第15年　回想録3

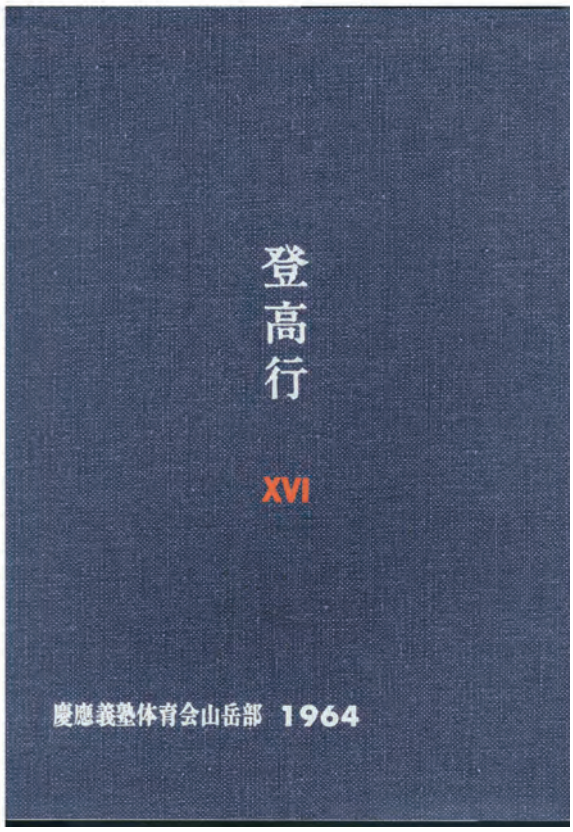


図45　登高行第16年　表紙

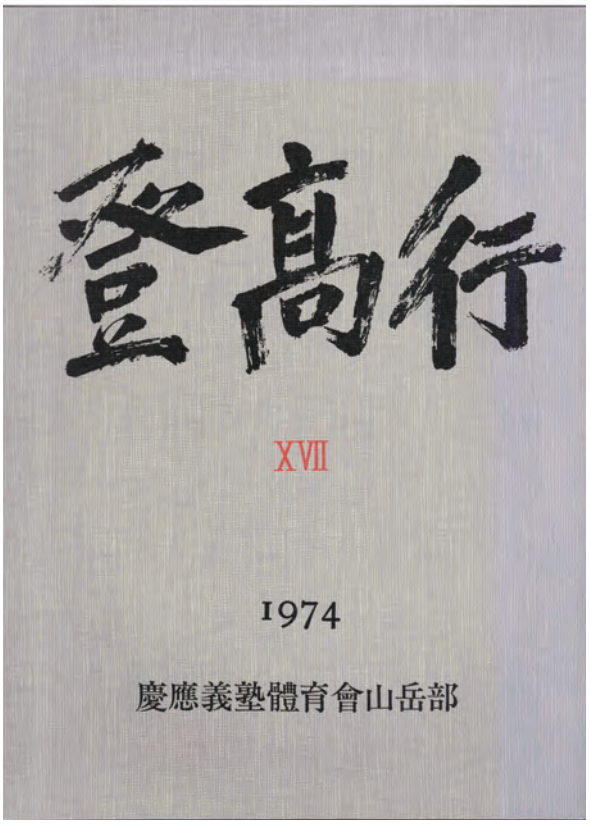


図46　登高行第17年　表紙

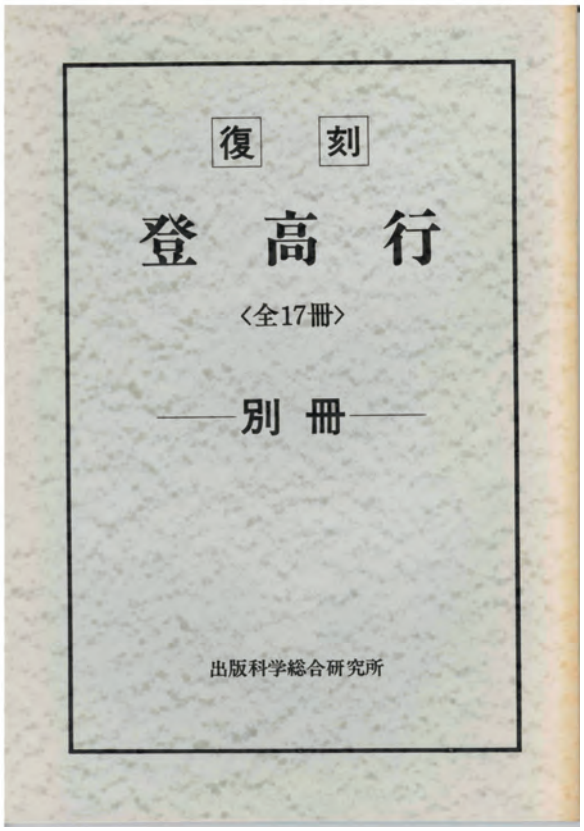


図47　登高行第６年　別冊表紙

表　登高行の記載内容一覧

登高行の号	出版年月	樹氷のある地域			合宿等の期間	著者名	記述内容			備考
		蔵王	西吾妻	その他の樹氷地			アイスモンスターについて	エビノシッポについて	その他	
登高行（１）	大正８年７月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（２）	大正９年６月	―	―	白馬岳スキー登山及び乙見山峠超え	大正9年3月13日から19日	大島亮吉	―	處々にある白樺の樹林には美しいクリスマス樹の如き樹氷の奇観をみる。	―	―
		―	スキー講習会（五色温泉）	―	大正9年3月6日から18日	―	―	―	―	―
		―	スキー講習会（五色温泉）	―	大正9年3月19日から31日	―	―	―	―	―
登高行（３）	大正10年６月	―	スキー講習会（五色温泉）	―	大正９年12月19日から大正10年１月初旬	―	―	―	―	―
		冬の蔵王越え	―	―	大正10年１月５日から９日	早川種三	夕光のかすかな光が尾根の樹氷のみを輝しかけた頃に明日来る事を約して・・・真暗な森道を木根に躓きながら七時半過ぎに牧場に帰って来た・・・三寶荒神山と高湯温泉に続く尾根は「しらべ（シラビソのこと）」の森林を以て覆われているのが見える。三寶荒神山と地蔵嶽の鞍部の森林は全く雪に覆はれて結氷してサンタクロースの森の如き感を懐かせるこの大森林は生きている様に風に吹かれて力強く動いている	神社は銀で作られる而もその銀雪は風の為に一面に銀の針を描してある様に思はれる	―	蔵王冬季初登踏破。アイスモンスターを樹氷とよんでいる。
		冬の蔵王越え	―	―	大正10年１月５日から９日	豊邊國臣	写真3枚	―	―	アイスモンスターの最古の写真
		―	吾妻山スキー登山	―	大正10年１月10日から13日	―	―	―	―	―
		―	東吾妻山及び一切経山スキー登山	―	大正10年２月10日から13日	―	―	―	―	―
		―	東吾妻から高倉山へ	―	大正10年2月9日から13日	橋本静一	―	―	―	―
		―	春の西吾妻	―	大正10年3月29日から4月1日	泥谷哲	―	標高千七八百米突の地点で・・・傾斜は愈々度を増して来た僅か三四尺雪上に出た樹枝には北風で吹きつけられた雪が半透明の氷となって一面に食付いた様な形をして氷付いている、下では見られない美しい図だ。人形石の南、千九百余米突の三角點に達したのは二時過ぎであった。	―	―
		―	五色温泉	―	大正10年３月20日から４月２日	―	―	―	―	―
		―	東大巓山スキー	―	大正10年３月19日から４月１日	―	―	―	―	―
登高行（４）	大正12年7月	―	スキー講習（五色温泉）	―	大正10年12月15日より大正11年１月15日	―	―	―	―	―
		―	スキー講習（五色温泉）	―	大正11年２月に１週間	―	―	―	―	―
		―	スキー講習（五色温泉）	―	大正12年１月に１週間	―	―	―	―	―
		―	―	磐梯山スキー登山	大正12年１月６日・７日	―	―	―	―	―
		―	スキー講習（五色温泉）	―	大正12年３月23日から３月31日	―	―	―	―	―
		―	宣伝（五色温泉）	―	―	宗川旅館	―	―	冬季は理想的な粉雪	―
		―	スキー練習（五色温泉）	―	大正13年１月１日から10日	―	―	―	―	―

登高行（５）	大正13年12月	冬の蔵王	―	―	大正13年１月８日から12日	西川不二雄	熊野岳へ邊りの並んだ梅の樹氷が時々照る光に眞白に光って見える。	あちらこちらに美しい木に咲いた雪の花を見出した。遠くから見れば丁度真白になった人間の様だ。・・・やがて北の方に天地白妙の中に氷で作られた祠を発見した。まるで大理石ででも作られて居る様に思はれる。	不帰瀧の鞍部を唯一騎雪煙を上げて下って来る。こんな天気を良くもつかんで登った彼の人は幸福な人だと羨んだ。後で聞けば東北大学の額田君だった。・・・新道小屋に着いた。	新道小屋についての記載
		―	スキー練習（五色温泉）	―	大正13年１月26日から27日	―	―	―	―	―
		―	磐梯山から吾妻へのスキー旅	―	大正13年３月23日から27日	漆山己年夫	―	―	―	―
		―	―	魚沼駒ヶ岳ちより八海山への尾根縦走	大正13年10月20日から25日	―	―	尾根の銀山側は樹氷がさきて気持良し。　薪に苦しむ。樹氷のさける	―	―
		冬山登山の或る危険に就いて	―	―	―	槇有恒	―	―	蔵王の刈田岳より熊野岳に到る鐵線を架して連絡した木柱の道標は濃霧の際にも積雪期にも、力強い保護者	―
		―	宣伝（五色温泉）	―	―	信夫高湯温泉	―	―	吾妻山群・家形山	樹氷の絵？
		―	宣伝（蔵王）	―	―	峨々温泉	―	―	蔵王を超えて高湯・上山	蔵王を越えるコースが設定されている
		―	宣伝（蔵王）	―	―	遠刈田温泉組合	―	―	賽の磧と清水原にスキー場を建設	賽の河原スキー場の開設
		―	宣伝（五色温泉）	―	―	宗川旅館	―	―	樹氷のかげに日を浴びて	宣伝文に樹氷を使った最古
		―	スキー練習（五色温泉）	―	大正13年12月31日から大正14年1月9日	―	―	―	―	―
		―	冬の吾妻山	―	大正13年12月31日から大正14年年1月9日	漆山己年夫	１６００米あたりから、もうスッカリ針葉樹林に成り切ってしまった。雪と氷に固められた針葉樹はギラギラと日光に輝いて青空と調和してすばらしく美しい。・・・壮麗な樹氷に輝く針葉樹の間を縫って西大巓まで一気に登って来てしまった。・・・樹氷に包まれて美しくゆったりと裾を引いていた。・・・中吾妻のみは常に美しい樹氷の針葉樹に蓋はれた姿を見えて居ました。	―	―	吾妻でも樹氷の用語が使われた

登高行（６）	大正14年12月	蔵王スキー登山	―	―	大正14年1月5日から9日	今岡義夫・齋藤長壽郎	7日　左手は杉ヶ峰の辺り、お伽噺の國のやうに一面に雪人形が立っている。間のなく自分達の廻りにも首を傾げた人形が點々と現れ出した。	7日　プルファーの地帯を過ぎで、針状の結晶となる。・・・右手に針状雪の大きな塊があった。その裏に廻って調べた時に、それが刈田岳のお宮であると知った喜び。・・・熊野岳まで行けると思って、直ちに出発した。途中、所々に道標が針状雪の衣を着ているのがある。	8日　帰りに、自分達は新設小舎に入って休んだ。この小舎は、最近出来たもので、二間半に三間位、二階建の相当頑丈なものだ。	新設小舎についての記載
		―	―	立山剣岳スキー登山	大正14年1月1日から17日	―	―	弘法茶屋のヒユッテのみでも来る価値がある。・・・樹氷が美しい。	―	―
		―	ある小屋の日記（吾妻精煉所）	―	大正14年3月25日から4月7日	中村法之助	―	雪の結晶は美しい窓飾を作っていた。	―	―
		―	宣伝（五色温泉）	―	―	宗川旅館			樹氷のかげに日を浴びて	―
		―	宣伝（五色温泉）	―	―	二階堂旅館			東北の壮観吾妻山	―
登高行（７）	昭和4年7月	―	吾妻山精煉所スキー練習	―	大正15年3月18日から3月15日	―	―	―	―	―
		―	―	鹿沢四阿山	大正15年3月23日から4月1日	―	―	―	―	―
		吾妻山精煉所、蔵王山	吾妻山精煉所、蔵王山	―	大正15年3月28日から4月4日	―	―	―	―	―
		―	―	四阿山、浅間山	昭和1年11月20日から24日	―	四阿は中腹より上　樹氷　美しく、粉雪深く、寒そうなりとて、二人とも恐れをなして、二千米を超ゆる僅かにして尾をまけるは後に想ふに恥ずべきものなり。	―	―	―
		吾妻山、蔵王山	吾妻山、蔵王山	―	昭和1年12月21日から昭和2年1月1日	―	―	―	―	―
		蔵王山	―	―	昭和1年12月23日から30日	―	―	―	―	―
		―	―	四阿山	昭和1年12月26日から昭和2年1月31日	―	―	―	―	―
		蔵王山越え上山へ	―	―	昭和2年1月1日から3日	―	―	―	―	上ノ山
		―	五色温泉スキー練	―	昭和2年1月2日から7日	―	―	―	―	―
		―	―	四阿山	昭和2年1月3日から8日	―	―	―	―	―
		―	―	四阿山	昭和2年1月5日	―	―	―	―	―
		―	―	吾妻青木小舎付近スキー練習	昭和2年2月2日から13日	―	―	―	―	―
		―	雪中野営の一経験	―	昭和2年2月2日から13日	片山弘	東大巓の三角點は予想の通りだだっぴろい。樹氷がきれいに咲いて、ゴゴールドラッシュの雞の様なのもいた。・・・大賀が突っかけさうになって、樹氷の中へ突っ込んで、でかくころんでスキーを折った。	―	―	―
		―	―	四阿山	昭和2年2月11日から12日	―	―	―	―	―

		―	―	横手山	昭和2年3月15日から24日	―	―	―	―	―
		―	―	北海道スキー練習	昭和2年12月20日から 昭和3年1月10日	―	―	―	―	―
		―	五色温泉スキー練習及び吾妻山精煉所	―	昭和2年12月30日から 昭和3年1月13日	―	―	―	―	―
		―	―	猫岳	昭和2年12月25日から29日	―	―	―	―	―
		―	五色スキー練習	―	昭和3年1月25日から30日	―	―	―	―	―
		―	―	四阿山	昭和3年2月7日から11日	―	―	―	―	―
		―	五色スキー練習	―	昭和3年2月9日から13日	―	―	―	―	―
		刈田岳、名号峯	―	―	昭和4年1月9日から14日	―	―	神社は全く雪に包まれエビノシッポのお宮となり美観を呈した。	―	エビノシッポが使われた最古
		―	吾妻山精煉所	―	昭和4年3月17日から20日	―	―	―	―	―
登高行（８）	昭和6年12月	―	家形山	―	昭和4年1月31日から1月3日	―	―	―	―	―
		―	スキー練習 （吾妻山精煉所）	―	昭和4年3月14日から20日	―	―	―	―	―
		―	スキー練習 （吾妻山精煉所）	―	昭和5年1月4日から9日	―	―	―	―	―
登高行（９）	昭和10年9月	蔵王山	―	―	昭和9年3月27日から28日	―	―	―	コーポルトフュッテ滞在	―
登高行（１０）	昭和11年11月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１１）	昭和12年12月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１２）	昭和14年3月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１３）	昭和16年5月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１４）	昭和20年2月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１５）	昭和32年6月	山岳とスキーの思出	―	―	―	鹿子木員信	ほとんど森林のない蔵王の東側を登り、さしたる困難もなく、蔵王の頂上に立って、白雪の中に紺青の湖水を湛うるその噴火口を見おろしたのは、午後二時頃だったかと思うのです。小憩の後、蔵王の西麓にある山形県の高湯に降るべく、徐々に滑降を始めたのです。蔵王の山頂附近は、ほとんど平らかな雪原です。一時、蔵王に付き物の濃霧に襲われましたが、幸い間もなく霽れて、天空には、冬の太陽が燦々と輝いているのです。雪は乾いて粉雪です。・・・平らかなりし雪原は、いつともなく、雪をかぶった庭石を配したような場面に変り、その中に、それらの庭石は、恰も五百羅漢が、清浄無垢な雪の上で座禅を組んでいるようなたけーメートルから二メートルの雪達磨と変つて来るのです。まことに此の世のものとも思われぬなごやかな景観です。私共は、恍惚として。我を忘れて、この羅漢の間を縫いながら、滑降を続けていくうちに、今迄の羅漢は、いつしか、雲をつくばかりの大入道に変つて来たのです。これはと思っているうちに、いつしか、大密林の梢の群れになって了い・・・	―	―	―
登高行（１６）	昭和39年11月	―	―	―	―	―	―	―	―	―
登高行（１７）	昭和49年7月	―	―	―	―	―	―	―	―	―